社会人が送る、
二度目の学生生活
TrymenT
脚色 えある
原作 TrymenT
V
TrymenT

TrymenT

今を変えたいと願うあなたへ

YoU KnowS ThE DeaR KnowS

V

TrymenT CharacteR RolL

登場人物名簿

なつき ふみ
夏杞文実

かわい おりつる
河居織鶴

ほしの
星乃あやめ

きば まさあき
喜羽正明

きみしま かける
君島 翔

TrymenT CharacteR RolL

四宮（しのみや） 匡（きょう）

八馬（はちま） 奏（かなで）

星乃（ほしの） 勲雄（いさお）

東雲（しののめ）すずね

星乃（ほしの） 朋美（ともみ）

山崎（やまざき） 颯太（そうた）

ははきぎ　ひ　な　こ
箒木日向子

たかぬま　な　み　え
高沼奈美恵

ミリャ

にった　つかさ
新田　司

かいぞう
海蔵もも

さとう　りひと
佐藤理人

TrymenT CharacteR RolL

ユウ

大舘（おおたて）流花（るか）

アイ

五十嵐（いがらし）啓介（けいすけ）

伊砂（いすか）真（まこと）

トト

三国義貴（みくに よしたか）

空白の星霜

―2031年、7月。
夏の虫の声が響き合い、森の木々が強く影を落とす。
洋風なたたずまいの真っ白な家の中から、微かにピアノの音が流れてくる。
……若いあやめが椅子に座り、グランドピアノを演奏していた。
指は踊るように、身体もまた跳ねるように、感情的に演奏を続ける。
ノックの音がしてもあやめは演奏を止めず、身体を揺らす。
扉を開け、母親が部屋に入ってきた。
それに気づかず、あやめは鍵盤に向かい続ける。
母親が肩をすくめてから息を吸い込む。
「あやめ、ご―は―ん」
演奏する手を止め、驚いたあやめが入り口に顔を向ける。
「あ、うん」
「食べなくていいの？」
呆れたように母親が言うと、あやめが椅子から立ち上がった。

「食べる」
あやめが昼食に向かうと、そこにはもう一人、少女がいた。
ソファに腰かけ、両手を投げ出すように肘置きに伸ばしたあやめが、テーブルを挟んで対面する少女を見つめる。
あやめに見つめられた少女──東雲すずねは姿勢よく正座し、テーブルのグラスを両手で持ちあげて口に運んだ。
「東雲さん、もっとくつろいだら？」
東雲が上目遣いにあやめを見てから俯いた。
「なんだか、他所の家にあがることってそうないから、落ち着かなくて」
「ふーん」
沈黙が続き、もう一口グラスのオレンジジュースを飲んだあと東雲が口を開く。
「ピアノは、星乃さんの部屋においてあるの？」
「ううん、別の部屋にあるよ。東雲さん家は部屋おきなの？」
東雲がうなずく。
「うちはそう。アップライトピアノだし、場所を取らないから」
「へー」
あやめが立ち上がる。

「ピアノのある部屋、いく？」
東雲があやめを見上げる。
「あ、行きたい」
あやめが微笑む。
「じゃあ、こっち！」

東雲の手が、グランドピアノの鍵盤蓋に触れる。
あやめは両手を後ろに組んで、東雲の後方で微笑んでいた。
「いいな、グランドピアノ」
「弾いてもいいよ」
「いいの？」
「うんっ。私も聞きたい」
東雲が目を輝かせて、ゆっくり椅子をひいた。
そこに腰掛けて鍵盤に向かい、鍵盤蓋を開く。
「星乃さん、何か楽譜はないかしら」
「ああ」
あやめが壁際の本棚の前に立ち、楽譜を眺める。
「[illegible]作曲者[illegible]」

なにがいい？　作曲者とか希望ある？」
「星乃さんが好きなものとかは？」
「う――ん。そうだなー」
本棚に並んだ楽譜の背表紙に触れながら、あやめが楽譜を探す。
一冊の楽譜に指を掛けて引き出す。
楽譜の表紙を見つめながら東雲のところに歩いていき、楽譜を差し出す。
「これ、リストの『愛の夢』なんかどうかな」
「私も、これ好き」
楽譜を受け取った東雲があやめを見上げて微笑む。
あやめも微笑みを返した。
譜面台に楽譜をおいて、東雲が背筋を伸ばす。
「弾けるかしら……」
楽譜をじっと見つめる、鍵盤に手を置き、東雲が演奏を始めた。

――数日後。
ソファに座るあやめがチラシを眺める。
テーブルの上のお菓子をつまみあげて口に運ぶ。

母親がきて、あやめの隣に座った。
「すずねちゃんのお母さんが、ここ一帯では有名な先生だって。すずねちゃんも通っている教室だそうよ」
「うん――、それは聞いた」
「音大受験も扱っていて、コンク――ル受賞者もたくさん輩出してるみたい。その分厳しめではあるそうだけど、通える距離にあるし、ちょうどいいんじゃない？」
「かなあ」
ピアノを弾く男性の姿が印刷されたチラシを、あやめはじっと見つめた。
先生の名前は、四宮というらしい。
「ん――じゃあ、ここにしようかな」

――さらにその数日後。
鍵盤にむかったあやめが、目の前の男性へチラチラと視線を送る。
あやめの視線の先で、四宮が一枚の紙に目を通していた。
「ふむ、千葉には最近引っ越してきたのかね？」
「まぁ、高校にあがるのと同時に

「はい、高校にあがるのと同時に……」
「そうか」
四宮が紙に目を落としたままうなずく。
「ご親戚や周囲にも音楽に携わるかたはいないと」
「はい」
四宮が足を組みなおし、顔をあげて微笑む。
「素晴らしいな。この時期にそれだけの演奏能力を身につけているのであれば、将来は有望だ」
「あ、ありがとうございます」
四宮がうなずく。
「その実力があれば世界的なピアニストも夢ではない。君にはその才能があるだろう。だが、勘違いはしてほしくない。己の実力をはき違え、自惚れてはそこまでだ。そうならないためにも、星乃にはあらためて、基礎の意義を理解してもらう必要がある。いいね？」
「はいっ」
四宮が微笑む。
「星乃はもう夢や目標を定めてはいるのかい」
あやめがうつむき、手慰みをする。
「えっと、将来は音楽に携われる仕事につけたらいいなと、思っています」

四宮が片手を口に当てて、小さくうなずく。
「そうか。では一緒に頑張ろう」
四宮が手を差し出す。
あやめもゆっくり手を出し、その手をとって握手を交わした。

――さらにそこから、月日が経って。

ピアノ椅子に座ったあやめが、体を四宮のほうに向けている。
「星乃、君は既に一定の能力を身につけているし、大学受験までにはまだじゅうぶんに時間がある。故に、君には受験向けの勉強と共に、是非コンクールを目指してもらいたい」
あやめが両ひざの上で手を揃えて、四宮を見上げる。
「はい」
四宮が微笑んだ。
「星乃は素直だな。だがそれでいい。まずは始めてみてから、浮かんだ疑問に向き合うほうがよい」
さて、と四宮が足を組みなおす。
「星乃は、音楽に携わる仕事を目指していると言ったな」

あやめが四宮の目を見つめたままうなずく。
「目指すジャンル、形式は多々あれど、ここでは主に受験やコンクールのための基本を教えていく。ピアノ奏法、音楽理論、ソルフェージュ、アナリーゼ。これらを通して音楽を理解し、初めて表現が可能になる」
四宮が両手を組む。
「基礎とは、『目的』、つまり『表現』を自身だけの力で導き出し、問題解決に臨める力のことだ。基礎はなくとも表現はできる。それでも学ぶべきとされるのは、ひとえに効率のためだ。効率は人の成長速度を劇的に変える。自分の気質を前提として、如何に効率的に学びを進められたかが結果的に勝敗を分ける」
四宮が一枚のチラシをあやめに差し出す。
あやめがそれを受け取り、目を落とす。
「まず最初に目指すはコンクールだ。君には練習を経た上で本番を体験してもらいたい。仕事についてからも、常に練習こそが仕事だと言える。練習と本番、これしかない」
「はい」
「それに、結果を残せば選択肢は大きく広がる。好きな音楽に携わるならば、己の実力を結果で証明しなくてはならない」
四宮があやめを見て微笑む。

「なに、実力さえつけてもらえば繋がりは私が受け持つ、そのために君は自分を磨くことに集中してほしい。君が演奏に時間を注ぎ、集中した時間が君のすべてとなる。故に遊べなくなることもあるだろう。だが、大学に入ってから遊ぶほうが効率がいいというのが私の意見だ。基礎を持った身で自由を得れば、大きな視野でより有益な情報を得られる」

「もちろん、そうします」

四宮がうなずく。

「さて、本題だ」

四宮が手元の楽譜を顔の横に掲げる。

「星乃は演奏能力も高ければ、聴音能力も素晴らしい。しかし、君は好きなように演奏しすぎている」

あやめが両手をぎゅっと握る。

「全ては楽譜に書かれている。それを読み取る知識を持つことだ。その経験を踏むこと、ひいては実力を示すことが君の財産となり基盤となる」

四宮がもう一度微笑む。

「星乃、私と一緒に上を目指そう」

――翌年、7月。
薄暗い照明のホールの席が、観客で埋まっている。
静まりかえった空間に緊張感がひろがっている。
あやめと東雲、四宮が並んで席に着き、壇上に顔を向けていた。
重厚なカーテンには『第56回アルテ・ピアノコンペティション全国決勝大会授賞式』と書かれた幕が掲げられている。
「続きまして、ソロ部門、F級の上位入賞者を発表します」
あやめと東雲の背筋がピンと伸びる。
「銀賞、7番、東雲すずねさん」
名前を呼び上げられた東雲が笑顔で立ち上がる。
客席に向かって軽く会釈してから壇上に歩いている。
その様子を、あやめがじっと見つめる。
「続きまして、金賞」
あやめが下を向き、目を瞑る。
膝の上で両手を強く握りこむ。
「――11番、山崎颯太さん。以上の皆さんです、おめでとうございます」
……。

……

……。

教室に集った人たちが帰り支度を整えていた。

あやめも後方の席で鞄に荷物をまとめている。

「あー、星乃さん、今日も練習？」

鞄を肩にかけて立ちあがったあやめが振り返る。

「えっと……、ごめん」

「いや、大丈夫大丈夫！　またね、星乃さん」

あやめは去って行く女生徒の背中に向かって小さく頭を下げ、教室の出口に向かった。

・
・
・

グランドピアノに向かい、あやめが演奏を続ける。

ただただ、鍵盤を機械的に打鍵していく。

「――やめ」

暗いまどろみの中で声が聞こえ、視界にかすかな光がひろがる。

「あやめ」

ゆっくり明確になるあやめの視界に、天井と母親の顔がうつった。
目を擦りながらソファの上で上体を起こす。
「あれ？　お母さん」
「またこんなところで寝て。寝るならちゃんとベッドで眠らないと疲れがとれないわよ」
あやめが部屋の時計をぼんやりと見上げる。
「うそ、もう夜じゃん」
「疲れてるのはわかるけど、夜はおばあちゃんのこと見ておいてもらわないと、あとで大変なんだから」
腰に手を当てた母親が言った。
「……ごめん」
ソファーテーブルに広がった楽典とノートをまとめながらあやめがつぶやいた。
「ご飯は？」
「いい。一旦寝てからまた勉強する」
あやめがフラフラとリビングの扉に向かう。
その背中を、母親が困り顔で見送った。

部屋の前に並んだ椅子に座ったあやめが、手元の楽典に目を落としている。
目の前の扉が開き、東雲が入ってきた。
「あ、あやめさん」
あやめが東雲を見上げる。
「お疲れさま」
あやめが楽典をしまって立ち上がり、扉のほうに歩みよる。
「あの、あやめさん」
「なに？」
「今度、後輩の出るピアノコンクール見に行くんだけど、あやめさんも一緒にどうかしら」
あやめが目を丸くする。
「あの、もし、よければ、なんだけど……」
あやめが苦笑いを浮かべる。
「コンクールは本番だけで十分かな」
あやめが手を振り、扉を閉めた。

・
・
・

グランドピアノを前にしたあやめが、鍵盤から手を離す。
おずおずと、隣に座っている四宮を見上げる。
四宮は両手を組み、片手を口に当てていた。
「ふむ」
口に当てていた手を下げて、小さなため息をつく。
「手癖がなかなか抜けないな」
あやめが俯いて肩を落とした。
「長らくやってきた感覚が抜けないことはよくあることだ。問題なのは、どう解決するかだが……」
四宮が足を組みなおす。
「この際、今までやってきたことは全て忘れて、再び0から挑むのもアリかもしれない」
「0から……ですか」
俯いたままあやめが言った。
「初心から、感覚を上書きしなおし、正しい順序を経て基礎の型を身につけなおす。しかし、その方法だと来年のコンクールはやや遠ざかる」
あやめが両手をぎゅっと握る。

「それは、嫌です」
「……あるいは」
あやめが四宮の顔を見上げる。
「表現を捨て、正確無比な演奏に徹する方法もある」
「表現を、捨てる？」
四宮がうなずく。
「星乃の演奏技術は、感覚で補われている部分が非常に大きい。感覚とは、論理的な組み立てによるものではなく、人によっても異なり、定義しづらいものだ。故に、手癖として出やすく、そして直しにくい」
机に置かれた楽典に四宮が手をのばす。
「であるのであれば。正確無比な論理に基づいた演奏に徹することで、問題の在処を明確にするんだ」

・・・

家族と食卓を囲み、あやめが黙々と食事を進める。

同じ卓に父と母が並んで座り、その対面には祖母が車椅子をつけて食事をしている。
「ピアノは、最近どうなんだ？」
父親があやめに視線を送った。
あやめが咀嚼を続けながら、手に持ったお茶碗をぼんやり眺める。
「うん、まあ。大丈夫」
「大丈夫そうにみえないから聞いてるんだけどな」
あやめが大きなため息をつく。
「受験勉強ならちゃんとやってるし、そっちはなんとか間に合わせられる」
「……。まあ、俺がつべこべいうことでもないな」
父親がご飯を口へ運ぶ。
あやめが父親に視線を投げて、ご飯を一口頬張る。
「色々大変だろうが、好きなことをしているんだ。頑張りなさい」
あやめの箸先が止まる。
顔を下に向けたまま唇を噛み、目を細める。
「……別に、好きでやってるわけじゃない」
父親と母親があやめを見つめる。
「じゃあどうして続ける」
「お父さんには、わからないよ」

……お父さんにはわからないよ」
父親が左手にもっていたお茶碗をおき、コップのお茶を一口飲む。
「俺は好きなことなんてさせてもらえなかった」
あやめがジロリとした目線で父親を睨む。
「じゃあ、なおさら私のことなんかわからないよ」
父親が眉をしかめる。
「お父さん、あやめのことを考えてあげて」
父親が深いため息をついた。
「……一番じゃないと、だめなのか」
あやめが手に持っていた箸を叩きつけるようにテーブルにおき、手を合わせる。
「ごちそうさまっ」
椅子を立ち、あやめは練習部屋に歩きだした。
「あやめ」
あやめが勢いよく食卓を振り返る。
「お父さんにはわからないよ!!」

・
・
・

あやめが音をかき消すように、エチュードを演奏する。
何度も何度も指を動かし、打鍵する。
あやめの指が同じフレーズを何度も繰り返し、機械のように演奏をこなしていく。
やがてあやめの指の動きが止まる。
深く息を吸いこみ、吐き出す。
あやめが顔をあげて、隣の四宮に目を向ける。
四宮がゆったりと拍手する。
「実にいい」
あやめの顔に笑顔が浮かんだ。
「私も、なんかちょっと癖が抜けてスッキリしたかなって……」
四宮がうなずく。
「ああ、やはり君はこういう技巧に対してはずば抜けている。楽譜に沿ってさえいれば、本番は怖くない」
「ありがとうございますっ」
四宮が腕を組み微笑む。
「この調子でいこう、星乃」

・
・
・

一面、白い壁の部屋で、あやめが一人ピアノに向かう。
陽が昇り、陽が落ちて、星が空に瞬いても、あやめは鍵盤を叩いた。
桜の花が散り、緑の葉をつけ、その葉も秋の風に吹かれて舞い落ちる。
あやめだけが、毎日変わらずにピアノに向かい続けた。
白い部屋の中におかれたグランドピアノ。
閉じられた窓からは白い光が差し込み、ピアノの椅子に座るあやめを照らしている。
あやめが鍵盤を叩き、ペダルを踏む。
鍵盤から一度指を離し、もとの位置に指を添え、同じフレーズを弾きはじめる。
姿勢を正し、手を丸め、手が瞬く間に鍵盤を叩く。
あやめの打鍵にこたえてハンマーが弦を叩き、音が鳴り響く。
繰り返し演奏を続けるさなか、あやめの手がふいに跳ねる。
「……っ！」

キンと甲高い音色が部屋に鳴り響く。
自分の片手を押さえ、ゆっくりその手に視線を向ける。
その手は小刻みに震えていた。

・・・

あやめがぼんやりと、自分の右手を見下ろす。
手首サポーターがつけられ、金属板に固定された自分の右手があやめの目にうつった。
「腱鞘炎か……」
小さなテーブルを挟んで座った四宮が、あやめの右手を見つめながら言った。
「左手だけでも、なんとか練習はしているんですが……」
四宮があやめの顔に視線を向ける。
「星乃、こういう時は落ち着くことだ」
あやめが俯いたまま黙り込む。
「練習をやめろとは言わない」
あやめが顔をあげた。

あやめが顔をあげた。
「むしろ止まらないほうがいい。だが、方法は変えるべきだ」
「練習方法を、ですか？」
四宮がうなずく。
「実際にピアノを弾くこと以外にもできることは山ほどある。しばらくはそういう練習に励めばいい」
四宮が再び、あやめの右手に視線を落とす。
「あとは、なおった時に怯えないことだ。大きな怪我はトラウマになりやすい」
あやめがうなずく。
「それは大丈夫です。演奏ができないことの方が恐ろしいですから」
四宮が微笑む。
「気を張るな、と言っても、なかなか難しいか。受験までまだ一年ある。ストレスや自己管理も多少意識のうちに入れておくんだ。いいね？」
あやめが微笑んでうなずく。
「わかりました」

・
・
・

開けた河川敷の斜辺にあやめと東雲が腰を降ろす。
川のせせらぎに耳を傾けながら、紙パックのカフェオレのふたをあける。
「ここ、春になると桜がすごく綺麗でね。私のお気に入りスポットなの」
対岸の桜並木を眺めながら東雲が言った。
両ひざを抱え、左手でカフェオレを持ったあやめがストローをくわえる。
「なんか、しのが好きそうな場所だよね」
東雲があやめに視線だけを向けて微笑む。
それから右手のサポーターに目を落とした。
「あやめさんのそれ、封印された右手みたいでかっこいいわね」
東雲に顔を向けてから、あやめが右手をあげる。
「私は結構辛いんだけど」
「大丈夫よ。あやめさんの技巧は、その程度の負傷で衰えたりしないから」
「……」
あやめが小さくため息をついて両膝を抱えた。

あやめが大きくため息をついて両膝を抱えた。

東雲もあやめと同じ体勢をとる。

「大学、一緒に行けるといいね」

「金賞は一緒には取れないけれどね」

東雲がじとっとした目をあやめに向ける。

「また、そういうこと言う」

そっぽを向いたあやめが叫んだ。

「あーあー！　むかつく！　まじしののめむかつく！」

「ストレートね……」

東雲がくすくすと笑う。

「私の右手の封印が解けたらあんなものじゃないから」

「期待してる」

東雲が立ち上がり、手を組んで背筋を伸ばす。

「心底、あなたと出会えてよかったと思ってる」

座ったままのあやめが東雲を見上げる。

「しの、学校じゃぽっちだもんね」

「……戦略的撤退と言ってほしい」

あやめも立ち上がり、おしりの草を左手で軽くはらった。

「実際、他にかまけることがない分、その時間を練習にあてられるから」

「本当は寂しいくせに」
東雲があやめに顔を向ける。
「あなただってそうでしょう。あやめさんは友人に誘われる分、余計寂しいんじゃないかしら」
あやめの目が座る。
「まじしのめむかつく」
「負けないわよ、あやめ」
東雲が微笑んで言った。
あやめは目を丸くしてから、右手の甲を東雲に向けて差しだし、ニヤリと口角を上げる。
東雲はその右手をぼんやり眺めてから笑顔を浮かべ、右手の甲を出してあやめの右手へコツンと当てた。
「…………」
あやめが右手を押さえてしゃがみこんだ。
「いったぃ！！！」

・

・

・

――來夢学園、音楽室。
車椅子に乗ったあやめが、鍵盤を指で打鍵していく。
何度か同じフレーズを演奏するとその手を止め、譜面台におかれた空白の楽譜を手に取りペンを走らせる。
ペンを止め、譜面台に楽譜とペンを戻して、再び鍵盤に手を添える。
あやめが鍵盤を打鍵していると教室の扉が開き、ユウが顔を覗かせる。
手を止めてあやめが振り返ると、扉を閉めるユウの背中が見えた。
ユウが前を向き、おなかの前で手をそろえる。
「こんばんは」
ほっと息をついたあやめが微笑む。
「二上さん……こんばんは」
ユウが軽くお辞儀をして、あやめのほうに近づいてくる。
「お邪魔してしまいましたか？」
「ううん、大丈夫だよ」
あやめが首を振りながらこたえ、ユウが微笑む。
あやめが隣に寄せていたピアノの椅子をユウに差し出す。

「ありがとうございます」
そういって、ユウが椅子に座る。
あやめが車椅子を操って、体をユウのほうに向ける。
「二上さんは、どうしてここに？」
ユウが鍵盤に視線を向ける。
「よい旋律が聞こえてきたもので」
あやめが頬をかく。
「二上さんに言われると恥ずかしいな」
ユウが微笑み、あやめの手を取る。
「？」
ユウがあやめの目をまっすぐ見つめる。
「ユウと、呼んでください。あやめさん」
あやめが目を丸くして、ユウの手を見つめる。
それから顔を上げ、ユウに微笑みかけた。
「ねぇ、ユウ」
「なんでしょうか？」
ユウも微笑みを返した。
あやめがユウの手をぎゅっと握る。
「私、あなたの奏でる音楽を聴いてみたい」

……演奏を終え、鍵盤からユウがゆっくり手を離す。
ユウの目が静かに開くのを、隣であやめが見つめていた。
ユウは顔をあげ、しばらく天井を呆然と眺める。
そのあとであやめに向き直り、すこし悲しそうに微笑んだ。
「人に聴いてもらったのは、久しぶりです」
あやめが口を開き、呆然とその様子を見つめる。
「この曲は、ユウが作曲したの？」
ユウがうなずく。
「この曲は、ある人と演奏するため、私が作曲したものです。……ついに、それが叶う事はありませんでしたが」
ユウが鍵盤を見つめる。
「私はずっと、この曲の練習を一人で続けている。そうして気付いたのは、そもそもこの曲は、私があの人と、一緒に練習したいがために作った曲だったんだなと」
「……なるほど」
あやめは、自分を納得させるようにうなずいた。
「ユウはその人が好きなんだね」

ユウが目を見開き、あやめを振り返る。
「すっ……」
頬を赤く染めたユウがあやめから顔をそらして俯く。
「そ……それは。ちがい……。……………」
言葉を詰まらせたユウを眺めていたあやめが、視線を外に向ける。
「……えっと」
しばらく目線をさ迷わせ、自分の手元を見つめた。
「まあ、いろいろあるよね……」
「…………」
ユウが小さく頷く。
あやめが上目遣いにチラリとユウを見てから、小さくため息をつく。
「でも、そっか……。だから私は、ユウのピアノに惹かれたんだ」
ユウが顔を上げあやめを見つめる。
あやめは譜面台におかれた、書きかけの楽譜を眺めていた。
「作品には……作り手の表現したいもの、伝えたいものが込められているると思うんだ」
ルーズリーフと書きかけの楽譜をあやめが見つめる。
『あなただけが知る世界』という文字に、あやめの目が止まる。

「ピアニストは、作り手が残した楽譜から本人が伝えたかったものを感じ、読み取って代弁する。たぶん過去の私は、頭ではわかっていても、その真意は読み取れていなかったんだと思う」
あやめがわずかに目を細めた。
「でも、〝私〟は翔を見てその真意に気づいた」
ユウがあやめの横顔を見つめたまま目を見開く。
「…………」
そして、手元に視線を落とした。
「……過去の自分を殺すためのの。存在証明」
あやめがユウを振り返る。
「…………」
呆然とユウを見つめてからやがて、あやめの顔に安堵の色が浮かぶ。
「……やっぱり、ユウもそうなんだ」
「…………」
言葉を返さないユウを、あやめがじっと見つめる。
「……もしかして、その人はもう亡くなっているの？」
ユウが息を飲み、顔を上げる。
「……どうして……」
あやめは顔を伏せて足元を見つめてから、もう一度ユウを見つめ

た。
「どうしてそう……思われたんですか……？」
　ユウの手がかすかに震える。
「……」
　あやめがユウの手をそっと握る。
「曲からは、苦しみや悲しみ、奏法からは怒りや訴えが感じられた。思えばあの日、ユウと海岸で再会した時も、あなたは愛の唄を歌っていたよね。でも、それは全て、失恋とも違う感情で……。そう……届けられない想い。叶わない願い」
　考えるように伏せていた顔を上げ、あやめがユウを見つめる。
「自分の心を閉じ込めるような、そんな戒律」
「……」
　あやめの視線から逃げるように、ユウが目を逸らす。
　しばらくそうしてから、ユウは小さく息をついた。
　ユウがあやめの両手を握り返す。
「……人は、温かいですね」
「……」
　あやめが心配そうにユウを見上げる。
　ユウが困ったような微笑みを浮かべた。

「海岸で歌っていた曲は、『月明り』というそうです。第二地区の歌姫さんがここにきて間もないころ、ストリートミュージシャンとして演奏していたインスト曲で。鼻歌をうたっているうちに、いつのまにか言葉に表れていて……」

あやめが目を丸くする。

「……そうだったんだ」

ユウがうなずく。

そのあと、悲しそうに微笑んだままピアノに身体を向け、撫でるように鍵盤に触れた。

「別の想いで補えないほどの感情を……どうしたら埋め合わせることができるんでしょうね」

・　・　・

車椅子に座ったあやめが、グランドピアノの鍵盤を呆然と眺める。

ゆっくり手を伸ばし、人差し指で白鍵を一つ押し込む。

短音が鳴り響き、あやめはその鍵盤をじっと見つめる。

背後から、あやめの肩に手が添えられ、あやめが振り返る。

背後から、あやめの肩に手が添えられる。あやめが振り返る

「…………」

やつれたあやめが、幽霊のようにあやめを見下ろしていた。

「私は、終わらせなくてはいけない」

あやめは黙ったまま、もうひとりのあやめを見上げ続ける。

「まだ試練は、終わっていない」

背後に立ったあやめが右手を前に出すと、それに連動するようにあやめの右手も動く。

その右手の挙動を、あやめは凝視する。

背後のあやめが左手を前に出し、あやめの左手もまた、前に動く。

両手がピアノの鍵盤におかれ、背後に立ったあやめが睨むように十指を見下ろす。

「終わりのないこの連鎖を断ち切るために」

両手が音もなく振り上げられ、勢いよくピアノを打鍵する。

「私は――」

・・・

音をたてて、あやめが勢いよく起き上がる。
焦点はあわず、肩で息をしながら自分の手のひらを見つめる。
荒い呼吸のまま反対側に眠る翔に顔を向ける。
ベッドで眠る翔を見て、あやめは右手で自分の喉に触れた。
目を閉じ、深く息を吸い込み、目一杯吐き出す。
目をゆっくり開き、上体をひねる。
「えっ？」
あやめが自分の下半身に顔を向ける。
両手で腿をさすり、揉む。
「うそ……なんで……」
両足を持ち上げるようにしてベッドの側面に投げだし、その両足をゆっくり床につける。
「……ベッド側面に付いた手すりに手を伸ばし、片手で体を支える。
両足に体重を乗せていきながら、ゆっくり立ち上がる。
両足は震えながらも、その体はしっかり持ちあがる。
「そんな……」
ふいに片足の力が抜け落ち、前屈みになったあやめの体がかたむく。
「くっ！」

「……、片手が手すりから離れ、大きな音を立ててあやめが倒れる。
「痛っ」
両足を震わせながら、あやめが顔を伏せる。
「あやめ⁉」
翔が勢いよく起き上がり、あやめに駆け寄って抱き起こす。
「大丈夫⁉　怪我ない⁉」
あやめが顔をあげると、心配そうな翔の表情が視界に入った。
「……ごめん、起こしちゃって。……ちょっと起き上がるのに失敗して」
「どした？　トイレとか行きたかった？」
あやめ、首を振る。
「大丈夫だよ。ちょっと目が覚めちゃって。心配かけてごめん」
翔が静かに安堵の息をつく。
「どうする？　ベッドに戻る？」
あやめがうなずく。
「わかった」
あやめの肩に手を回し、ゆっくりと体を持ち上げる。
あやめの手がベッドの手すりへ届くように寄せ、あやめが手すりを掴む。

二人の力を利用して体を起こし、ベッドに体を運んでいく。
「ごめん、ありがとう……」
ベッドに横たわったあやめが言い、体を起こした翔が微笑む。
「大丈夫だよ。他になにか、できることあるかな」
あやめがゆっくり首を振る。
「また、寝ようと思う」
翔があやめを見つめたままうなずく。
「わかった」
翔も自分のベッドに戻っていき、あやめがその背中を見つめる。
「ねえ、翔」
「ん？」
「もし、迷惑じゃなければ……」
あやめが伏し目がちに言うと、翔がゆっくりあやめのもとに戻ってきた。
「大丈夫だよ」
あやめが困ったように微笑みながら、翔を見上げる。
「その、今日だけでもいいから、一緒のベッドで寝てもいいかな……」
「うん、いいよ」
翔が目を丸くして、すぐに微笑みを浮かべた。

うん、いい。」
翔を見つめてから、あやめが恥ずかしそうに顔を伏せる。
それから体をベッドの隅に寄せる。
翔があやめの横に寝そべる。
「なんか、怖い夢でもみたの？」
「うん、ちょっと……」
翔が微笑み、あやめの右手を手に取る。
「あやめにもそういうことあるんだね。いつも私が怖がる側だから、ちょっと嬉しい」
あやめが苦笑い浮かべてから、穏やかに微笑む。
「ありがとう、翔」
「どういたしまして」

・　・　・

部屋の中央のテーブルを囲み、織鶴と文実、喜羽が座っている。
蝉の鳴き声が際立つ中で、三人がそれぞれ黙々と作業を続けていた。

「はあ」
ペンをおいた文実がため息をついて机に突っ伏した。
織鶴と喜羽が文実の後頭部にチラリと視線を送る。
「ガリ勉ども。たまには君らから休憩を呼びかけてよ」
恨めしげに顔をあげた文実が言うと、織鶴と喜羽もペンをおいて体を伸ばした。
「文実はす一ぐ休憩入るよね」
「人間の集中力は15分周期だから」
「八馬さんが居るときとは大違いだな、まったく」
文実の体から力が抜け、再び机に突っ伏す。
「ああ一。なんでこの二人なんだ一っ」
「卒業まで折り返し地点でイベントもうない。勉強もみな大詰めということだろう」
「恋愛にかまけている暇はなさそうですね」
顔を上げた文実が、遠い目で窓の外を眺める。
「学校では勉強尽くめで、社会に出たら仕事尽くめ。余裕ができる頃には結婚適齢期を過ぎて独身。人生ってなんだろう」
「なんだかんだ言いながら、お前はちゃんと将来を見据えているじゃないか。俺はむしろ夏杞に焚きつけられているところがあるからな」
文実は頭をテーブルにつけ、前方をジっと見つめる。

文実は顎をテーブルにつけ、前方をじっと見つめる。
それから体を起こし、後ろにかたむけた上体を両手で支えた。
「喜羽は卒業したらどうするの」
喜羽が腕を組む。
「東京でＩＴ企業に就職したいと考えている」
「うっそ。似合わなすぎじゃない？」
喜羽が文実に視線を向ける。
「体を使う仕事は厳しいんだよ」
「え、そうなんだ」
「まあな」
「喜羽くんって、どこ住みなの？」
「岐阜県だな」
「え、隣じゃん」
「そうなのか？」
文実がうなずく。
「あたし名古屋だから」
「ほう。奏は大阪市だ。会えない距離じゃないな」
文実が深くため息をつく。
「奏くん、今は東京に住んでるから」
喜羽が目を丸くする。

「そうなのか、知らなかった。しかし、そうか。卒業したら皆とは会いづらくなるのか」

「なんか、寂しいよね」

喜羽がもう一度目を丸くした。

「お前もそんなこと思うんだな」

「……」

織鶴が文実を見つめながら、あきれ顔で微笑む。

それから、窓の外に顔を向けた。

蝉の鳴き声が続き、やがてピタリと止まった。

舞台裏の小さな休憩場で、八馬はタブレットを操作しながらノートにペンを走らせていた。

周囲には軽食をとる人たちがいるが、八馬は手元に集中していた。

やがて周囲の人も去って行き、八馬だけが残る。

ペンを止め、ノートをじっと見つめる。

「また、事業計画書の発案作業ですか？」

ノートを見つめたまま、八馬が小さくうなずく。

「まっ、今は情報の整理をしているところだ

に……今は情報の整理をしているところで……」
八馬がノートから顔をあげて振り返る。
「……なるほど」
八馬の背後に立ったユウがノートを覗いている。
八馬の体がピクリと跳ねる。
「……びっくりしました」
ユウがチラリと八馬に視線を向けてから体を起こす。
「こんにちは」
「……こんにちは、二上さん」
八馬が体をユウのほうに向けて座り直す。
「二上さんから声をかけてくださるなんて珍しいですね」
「…………」
ユウは表情を変えずに、再びノートに視線を移す。
「八馬さんは、起業を考えておられるんですよね」
ユウが八馬に顔を向ける。
「どうして、トライメント計画をサポートする下請け事業を選んだんですか？　これなら、直接社会福祉公社へ所属してもよいように思えるのですが」
「…………」
驚いたようにユウの横顔を見つめてから、八馬もノートに視線を移

す。

「……恐らく、それが社会福祉公社の目的だからです」

「……。どういうことですか？」

八馬がチラリとユウに視線を向けてから前を見る。

「もう十年以上前のことになりますが……。当時の日本は、少子高齢化問題と政府の借金能力の限界によって、長い間不景気が続いていました。インフレ政策によって世界的には好景気だと言われてはいましたが、それはごく一部の富裕層や大企業だけだったたんです。ですが、そうせざるを得なかったのも事実です。資本主義経済という性質上、高い生産性を誇る上位企業しか、新技術開発という打開策を打てませんでしたからね」

八馬がユウに顔を向ける。

「結果、大企業の技術力だけが成長するようになり、社会的格差は広がる一方だった。日本における中小企業の割合は、全企業の９９・７％です。当然、会社の倒産は相次ぎ、不良債権と失業者は増える一方でした。やがて都内で生活を維持できなくなった人たちは地方に帰らざるをえなくなったんです。そんな大量の失業者に学習環境と再雇用機会を与えたのが、社会福祉企業『LieF』でした。『LieF』は、使われなくなった学校や施設を再利用し、独自開発した人工知能

Keller』を用いて新たな仕事を創出し、大量の雇用を行ったんです」
「…………」
　ユウ、小さく手慰みをする。
「……それが、トライメント計画の始まり……ですよね」
　八馬がうなずく。
「再建させた学校では無償で研修できる環境を整え、新しい仕事を築き、起業する方法を教えた。そうした一つ一つの学校が特別支援学校と呼ばれるようになって、その周囲には会社がいくつも創られた。つまり、公社は学園の卒業後、就職を斡旋することができる提携企業を自ら作り、地方の平均賃金を底上げして、景気回復を図ろうとしているんです」
「……」
　八馬がユウに微笑みかける。
「現在のトライメント計画は、全国民が同じ社会問題へ目を向けられるようにするため、教育という形でできるだけ多くの種を蒔いている段階です。国が関わることで増える制約もありますから、僕は民間会社としてのサポートを考えている……という次第です」
　ユウが口を開けたまま、ポカンと八馬を見つめる。
　その視線を受けた八馬が苦笑いを浮かべて、小さく咳払いする。

「……すみません。伝わりましたでしょうか……」
ハッと息を飲んだユウがうなずく。
「あ、はい。ありがとうございます」
ユウがぺこりと頭を下げた。
「お尋ねしたいことは別にあったんですが……結果的に納得のいくこたえを頂けました。すごく勉強になりました。ありがとうございます」
もう一度ユウが頭を下げる。
「……いえ……お役に立てたのであれば……」
ユウがうなずく。
「……………」
八馬、ユウをじっと見つめ、その視線を受けたユウが首をかしげる。
「……二上さんは、トライメント計画の関係者なんですか？」
「ち、ちがいます。このしまの、かんこうあんない。さぽ一と、みまもる、そんな感じです……」
「…………」
八馬が顔を伏せて、小刻みに震えながら笑いをこらえた。
「…………」

しばらくしてから顔を上げ、微笑みをユウに向ける。
「では、良きトライメント計画を願う者同士、これからもよろしくお願いします」
「……！」
ユウが目を丸くして八馬を見つめた。
それからゆっくりと、ユウが微笑みを浮かべる。
八馬はその様子に目を見開く。
「こちらこそ、よろしくお願いします」

音楽室に差す白い明るみの中、車椅子のあやめが呆然と鍵盤を眺める。
「譜面台におかれた書きかけの楽譜に視線を移す。
……」
『あなただけが知る世界』
譜面台に手を伸ばし、書きかけの楽譜とルーズリーフを手に取る。
バインダーにルーズリーフを閉じて、楽譜を挟む。
「……」
バインダーの一ページ目を開き、あやめの指がページを繰ってい

く。
『面接について』
『生活費について』
『確定申告について』
綺麗な文字でまとめられたページが続く。
『音大受験』と書かれたページで、あやめの手が止まった。
そのページをじっと見つめ、撫でるように指で触れ、その手を握りこんだ。
ルーズリーフを閉じ、譜面台におきなおす。
あやめの視線が再び鍵盤に落ちる。
無表情のまま、両手が鍵盤に向かい、片足が自然とペダルに伸びる。
脱力し、静かな空白が訪れる。
目蓋がゆっくり閉じられる。
風に吹かれた雲が太陽を覆い、床に落ちた光が薄まっていく。
「――――」
微かな呼吸と共に、両手が、体が跳ねる。
音楽室から学園全体に、練習曲が響いていく。

・・・

――2033年、7月。

薄暗いホールの席が観客で埋まっている。

はりつめた空気の中、壇上で会長とあやめが向き合っている。

『第57回アルテ・ピアノコンペティション　全国決勝大会授賞式』と書かれた幕が高く掲げられていた。

会長が、うしろに控える人物から賞状を受け取り、あやめのほうに向き直る。

「表彰状、星乃あやめ殿。第57回アルテ・ピアノコンペティション、全国決勝大会にて頭書の成績を収められました。ここにその栄誉を称え、表彰いたします」

賞状を持ち替えて、あやめのほうに差し出す。

「おめでとうございます」

あやめが両手で受け取り、丁寧にお辞儀する。

「おめでとうございます」

会場が大きな拍手に包まれる。

あやめが観衆に顔を向け、笑顔になる。

[illegible]

・・・

――――。

――。

―。

暗闇の底。

休息を終えた身体が目を覚まし、視界が鮮明になっていく。

真っ白な天井。独特な機械音。

取り戻された視界の中に、一人の男性が映り込む。

「あやめ⁉」

父親に続き、母親もあやめの名を呼んだ。

「早く、先生を！」

朦朧とした意識のなか、顔を声のほうに向ける。

目に涙を浮かべた母親が、あやめの手をとる。

「あやめ！　お母さんがここにいるわ。しっかり意識を持って！」

・　・　・

病院のベッドに横たわったあやめの左腕に、点滴の注射が打たれている。
あやめのぼんやりした視線は、父親に向けられていた。
父親はベッド脇のテーブルに、本をおいていく。
そこに混ざっていた楽典の表紙の上で、あやめの視線が止まる。
父親がベッド側面の椅子をひいて腰を下ろす。
「……悪かったな、あやめ」
あやめを見つめる父親が静かに言った。
「どうしたの？」
あやめが目を丸くする。
父親が静かに息を吸いこみ、ゆっくり吐き出す。
「俺は確かに、お前のことをわかっていなかったようだ」
あやめが父親をじっと見つめる。
「ううん。私もお父さんの苦労は分かってあげられないから、お互い様だよ。……だから、私もごめん」
少し視線をそらしてあやめが言い、父親は目を伏せた。

沈黙が続き、再び父親が口を開く。

「本当は、心を削ってしまうような無理はしてほしくない……。だが、お前を納得させる言葉は持ち合わせていない。俺にできるのは、お前を応援することだけだ」

父親があやめに微笑みかける。

「あやめ、ピアノコンクール優勝おめでとう」

あやめが父親に顔を向け、自分に向けられたその微笑みをじっと見つめる。

「お前は俺を納得させる結果を示してみせた。音楽のことはわからないが、できる限りあやめに協力するよ。だから、あやめはあやめの信じる道をいけばいい」

「…………………」

両膝に両手をおいて座る父親を、あやめがじっと見つめる。

その視線をゆっくり動かし、テーブルにおかれた楽典に向ける。

「……私の……信じる道……。私の……」

浮ついたようにあやめがつぶやく。

「……あやめ、大丈夫か？」

あやめがチラリと視線を父親に向け、前を向く。

「うん、大丈夫だよ」

「……父親が顔を伏せる」

「……必要な協力はする。だが、過労で倒れるような無理は、できればしないでほしい。あやめの努力を否定するつもりもないが、もう少し——」

「大丈夫だよ」

父親が顔をあげる。

あやめが父親を見つめていた。

「……」

あやめが小さく微笑む。

「もう、大丈夫」

顔を伏せ、自嘲気味な苦笑を浮かべる。

「なにも知らなかったから無理をしただけ……次は生活リズムから見直すから」

父親が安堵したように微笑む。

「……そうか。そうだな。大学受験までは余裕がある。無理をしないで、安定した土台を築いていこう」

「………。うん、そうだね」

ゆっくり顔をあげたあやめが、楽典の表紙を見つめる。

「そうする」

……[illegible]」

人気のない静かな病室。

ベッド脇の机を寄せて、あやめがノートにペンを走らせる。

楽典を袖におきながら、時折手を止めては、再びペンを走らせる。

「…………」

『いつからだろう、音楽を自由に演奏できなくなってしまったのは』

無表情に、自分の書いた文字をあやめが見つめる。

『音楽が嫌いになった、音楽に飽きた、音楽以外に好きなものができた。どれも違う』

『きっと、基礎を知ってしまったからだ。論理的な原理と回答の一致。これを守れば必ず結果を出せるだろう』

『次も、その次も。勝ち続けることができる。そのために必要なプロセスが、今の私にはわかってしまう』

『これが効率であり、突き詰めていけば、無駄のない無意識な行動として基礎が身につき、いつか自由な表現にたどり着けるんだろう』

『理屈はわかる。でも、あと何年続ければ自由に演奏できるようになる？』

[illegible]

『効率を知ってしまった私は、無駄な演奏をすることができるの？』
ピタリとあやめの手が止まる。
「…………………」
『できない。無駄な演奏はできない。自由な演奏はできない。好きなように演奏することは、もうできない』
『きっと、いつかたどり着けるその時まで』

・　・　・

――來夢学園、寮にて。
室内灯のない暗い部屋の真ん中に仕切りを立て、あやめが机に向かっていた。
仕切りの向こうでは翔が寝息をたてている。
椅子に座り、わずかに両足を動かしながら、あやめがペンを走らせる。
『だからこそ、終わらせる必要がある』
『どうしようもない事実から逃げたかつての私の行き着く先は、死だ』

譜面台に開かれたバインダーの片面には空楽譜が、もう片面には文字の記された紙があった。
「……。……なに……これ……」
手を伸ばし、フレーム越しに紙に触れる。
あやめが目を見開く。
「……これって……私が……？」
自分の手を見つめ、震える手をゆっくりと引く。
そのまましばらくその手を見つめてから、ハンドリムに手をおく。
恐る恐る、自分の両足に視線を落とす。
片足はグランドピアノのペダルに伸びていた。
「……………」
ペダルを踏み込んだ片足を、ゆっくり離す。
顔をあげて、譜面台におかれたメッセージを見つめ、片手にもった楽譜に目を落とす。
『あなただけが知る世界』
「…………」
力が抜けたように、背もたれに身を預ける。
「……」
呆然と、口を開いたまま天井を見つめる。

「……そうだよ」

「あやめの目が泳ぐ。

「……大体、私はどうしてエチュードを……。あのとき、翔のことを……」

楽譜を持つ手に力が入る。

ゆっくり顔をおろし、手元の楽譜を見つめる。

「……私は…………。…………」

・・・

――2034年、7月。

あやめがレジのボタンを押し、おつりとレシートを男性に手渡す。

「ありがとうございました」

ペコリとお辞儀をしてから顔を上げると、あやめの目の前に女性が立っていた。

「久しぶり、あやめさん」

東雲がおにぎりとお茶のペットボトルを二つずつレジにおく。

「……いらっしゃいませ」
無言でレジをうち、会計作業を進めるあやめを、東雲がじっと見つめる。
「475円になります」
東雲が財布を取り出し、あやめに五百円玉を差し出す。
それを受け取ったあやめが、お釣りとレシートを渡す。
差し出されたあやめの手からおつりとレシートを受け取った東雲が、そこに紙の切れ端をおいた。
あやめはそれを見つめてから、東雲を見上げる。
「アドレス、新しくなったから登録しておいてもらえると」
あやめはもう一度紙を見つめて、それをポケットにしまった。
「私、もう携帯とか持ってないけど」
「……そうなの」
東雲がわずかに俯き、顔をあげてあやめを見つめる。
「例の公園で待ってるから」
そういって東雲は店を出て行った。
その背中を見送りながら、あやめはポケットの中の紙をぎゅっと握った。

風を受け、髪をたなびかせながらあやめが河川敷を歩く。
ランニングする男性があやめを追い越していき、その背中をぼんやり見つめる。
そのまま歩いていると、川にかかった橋から水面を眺めている東雲があやめの視界に入った。
小さくため息をつき、あやめは歩いた。
あやめが東雲に歩み寄る。
「……だいぶ待ったわ」
「バイトだったから」
肩をすくめながらあやめが言った。
「そうじゃない」
橋の手すりから顔を上げ、東雲が振り返る。
「言ったでしょう。私は基本コミュ症なのだから、一人にされると困るって」
あやめが困ったように首をかしげる。
「……連絡しても通じないし、なにをしているのかと思えば」
東雲があやめを見つめる。
「……」

あやめが目を閉じ、ため息をついてから東雲の視線を見つめ返す。

「私のことはほうっておいてって言ったでしょ」

「1年近く待ったのよ。それで、あなたはなにか変わったの？」

あやめが眉をしかめて視線を逸らす。

「そういう話なら、私帰るけど」

東雲、あやめを見て目を見開く。

それから下を向いて、

「ごめんなさい。そういうつもりじゃないわ……」

東雲が上目遣いであやめを見上げる。

「能力のあるあなたが、そんな状態でいるのが嫌なの」

「……」

東雲が顔をあげ、あやめをまっすぐ見つめる。

「あなたがいなくなって気づいた。私は、あやめさんがいたから頑張れていたんだって。私は、もっとあやめさんを見ていたい。あなたの隣を歩きたい。あやめさんは、私にとっての憧れで、あなたと並ぶことが、私の夢なの」

俯いたあやめが、目を細めて唇を噛む。

風が吹き、あやめの髪が揺れる。

あやめが顔をあげ、東雲の視線を見つめ返す。

「そういうのが、迷惑なの

そういうのが、迷惑なの」

「あやめさん……」

「私は、あなたがいたから辛かったっ。私は、期待されるあの環境が苦痛だった！　あなたの期待に応えて、世間の期待に応えて、そういう私でい続けることが、どうしようもなく辛かった。私はただっ……!!　みんなで楽しく演奏したかっただけなのに！！！」

「……」

あやめが頬を伝う涙を拭う。

東雲は黙ってあやめを見つめていた。

「……ごめん。……だから、もう、私にはかまわないで」

そう言ってあやめは東雲に背中を向けた。

あやめが歩き出す。

その背中を見ながら、東雲は両手を強く握りこんだ。

　リビングの小さなカウンターテーブルで、あやめがノートパソコンに向かっている。
　マウスを操作しながら、じっと画面に見入る。
『就職支援登録サイト』
　小さく息をつき、背もたれに背中をあずけてしばらくその画面を眺める。
　部屋の奥からガタリと大きな音がして、あやめが振り返り、椅子から立ち上がった。
……ベッド脇の車椅子の前で祖母が倒れている。
　あやめが駆け寄り、祖母の体を抱え起こす。
「おばあちゃん、一旦ベッドに上げるね」
　祖母が力なくうなずき、あやめに支えられながら体を起こす。
　ベッドに横たわらせてからあやめが立ち上がり、祖母を見下ろす。
「下、取り換えるね」
　慣れた手つきで祖母の衣類を脱がせる。
　祖母の震える手であやめの手に触れる。
　あやめが動きを止めて、祖母の顔を見上げる。
　祖母が口をぱくぱくと動かした。
　あやめが微笑む。
「こ、こ、こ、ご……

「大丈夫だよ」
あやめは脱がした衣類を籠に入れた。

テーブルに夕飯が並び、あやめが食事を進める。
その反対側に母親が座り、隣に車椅子の祖母が並ぶ。

「それで、調べもしないのに全然関係のない例を挙げてでっちあげるのよ。本当困っちゃう」
「ふーん」
ご飯を頬張りながら、あやめが母親を見る。
母親は肩肘をついてため息をついた。
「そんなんで相手の望むものなんてできるわけないのに、代理店のかたには自信満々にできるって伝えちゃってってさあ。自分のやり方が正しいって信じて、全く疑ってないのよ、あいつら」
「なんか、大変そう」
「そうなのよー。だからごめんっ。しばらく帰りが遅くなるから、ご飯は自分でなんとかお願い」
「うんー、わかった」

「谷野さんにはもう伝えてあるから。あと、冷蔵庫の中のデザートの賞味期限、明日までだから食べてね」
あやめがご飯を咀嚼しながらうなずく。
「あ、それと、今日すずねちゃんに会ったんだけど」
「ん？」
「今実家に帰ってきてるんだってね。あやめと遊びたがってたわよ」
「ああ、うん」
あやめがもう一口、ご飯を口に運ぶ。
母親があやめをじっと見つめる。
「あなた、すずねちゃんと喧嘩でもしたの？」
「ぶっ」
あやめが口を押えながら咳き込む。
「なんでっ……ごほごほっ、そうなるの」
「まったく。早く仲直りしなさいよ」
あやめがお茶を一口飲む。
「そういうんじゃないからっ」
「じゃあ、どういうのよ」
あやめが小さなため息を吐く。
「色々あるの」
母親があきれたように微笑む。

母親があきれたように微笑む。
「あなたのこと、随分と気にかけていたわ」
「…………」
あやめは黙々とご飯を食べ進め、最後の一口を飲み込む。
「ごちそうさま」
立ち上がり、食器を台所に運んでいく。
その背中に視線送る母親が微笑む。
「誰に似たんだか」

あやめがソファで携帯を操作している。
手を止めて、テーブルの上に放られた、ぐしゃぐしゃの紙を手にとる。
じっとその紙のかたまりを見つめる。
「はぁ……もうっ！」
丸まった紙を開き、そこに書かれた数字を見ながら、あやめは携帯を操作した。
「ほんと、むかつく」

あやめと東雲が向かいあい、テーブルには二つのアイスカフェオレがおいてある。
二人がコップを手にとりストローをくわえる。
同じ動作で一口カフェオレを飲み、同時にコップをおく。
「微妙な映画だったね」「いい映画だったね。えっ？」「えっ？」
「なんて？」
「あ、いや。なんでもない」
「ええっ、気になるんだけど」
視線を逸らしたあやめがカフェオレを手に持ち、もう一度ストローをくわえて一口飲んだ。
「そういえば、どうなの、大学のほうは」
「え？」
呆然とあやめを見ていた東雲が目を丸くする。
「ああ、大学ね……」
東雲がうつむいて静かに微笑む。
「あなたに見せられないくらい、だいぶ落ちこぼれてしまったかもしれないわね」
「そうなの

そうなの？」

東雲がうなずく。

「一応、今後のことも考えて一人暮らしをしながら生活しているけど、なかなか、自由になったものだわ」

「……自由か」

「もちろん、練習は欠かさず行っているけど、前のほうが断然忙しかった。それ以外はある意味変わってない。先生に師事して、相変わらずぼっち生活を送って、そんな感じ」

「……ふーん。周りのレベルは高いの？」

東雲が顔をあげてあやめを見つめる。

「ん、なに？」

「ああ、いえ……」

俯いた東雲がゆっくり口を開く。

「……レベルは、そうね。もちろん高いけれど……なんというか、それだけって感じ」

「どういうこと？」

東雲が顔をあげてあやめの目を見つめる。

「物足りないわ」

あやめが目を丸くして、間をあけてから吹き出す。

「なにそれっ、上から目線」

頬を赤らめた東雲が顔を背ける。
「あ、あなたが尋ねるからっ……」
前髪をいじりながら東雲が言った。
「そういうあなたは、最近何しているのよ」
ストローをくわえていたあやめが、視線を東雲に向ける。
「バイトしながら、就職活動」
「就職？　就職するのっ？」
「ま、うまくいってないけどね」
「はぁ……」
あやめが再びカフェオレに口をつける。
「ピアノしかやってこなかったから、世間に対して相当無知だったということはわかったかな」
東雲があやめを見つめる。
「そう……」
「あと、地元就職だと車がね」
「車？」
「うん。必要そうだったから免許とった」
「え⁉　あやめさんが車‼」
「失礼だな」
[illegible]

東雲が深いため息をつく。

「なんだ、意外と相変わらずなのね……」

「？」

東雲が顔をあげて微笑む。

「元気そうなら安心したわ」

「ん、まあ、それなりには」

東雲が携帯を取り出し、画面に目を落とす。

「このあと、どうしましょうか」

「んー、私この辺わからないし、案内してよ」

「私もそんなに詳しくはないけれど……」

東雲が顔をあげて唇に指を触れる。

「ああ、そうだ。ちょっと行きたいところがあるのだけど、いいかしら？」

「ん、いいよ」

東雲が微笑む。

「じゃあ、一緒にデートね」

本棚の前で、あやめが楽譜に目を落とす。

隣の東雲が、あやめの様子を眺めていた。
「案外、普通に楽しんでもらえてるようでよかったわ」
「ん？」
あやめが楽譜を見つめたままわずかに首をかしげる。
「ちょっと、嫌がるんじゃないかと思っていたから」
「しのとデート？」
「ちがっ……そうなの？」
東雲があやめを振り返り、眉を寄せる。
「別に、楽譜や楽器を見たり、音楽を聴くことが嫌なわけじゃないし」
東雲があやめをじっと見つめる。
「……じゃあ、ピアノ見に行っていい？」
あやめが楽譜をおき、東雲の視線を見つめ返す。
「別に、いいけど」
そうして、あやめ達はさっそくピアノの元へ。
様々な種類のデジタルピアノが並ぶ中、東雲がその一つの前に立ち鍵盤に触れる。
あやめは隣で、東雲の手元を見つめていた。
「そういえば、グランドピアノは買えたの？」

「いえ、また買えていないわ」
「どうやって練習してるの？」
「今は大学があるから」
「まあ、そうなんだろうけど……」
　東雲が立ちながら演奏を続ける。
　その手元をあやめがじっと見つめる。
　東雲が鍵盤から静かに手を離した。
「やっぱり、打鍵感が全然違うわね」
「そればかりはね」
　あやめが相づちを打ったとき、二人の背後から軽快なピアノの旋律が流れてきた。
　あやめと東雲が同時に振り返る。
「あーっ、やっぱり星乃さんとすずねちゃんだーっ」
　あやめと東雲のほうに顔を向けていた颯太が、電子ピアノから両手を離す。
「こんにちわーっ」
　高い声で楽しげに言いながら、あやめと東雲の元へぴょこぴょこと歩いてくる。
「えっと？」
　あやめが警戒しながら、後方に身を引く。

「颯太くん……どうしてここにいるの？」
あやめがうしろに立つ東雲を振り返る。
「颯太くん？」
颯太が笑顔になる。
「えっへへー、きちゃった！」
あやめと東雲が黙ったまま、しばらく颯太の笑顔を見つめる。
そのあとで、あやめがジトッとした視線を東雲に向けた。
「さっそく浮気ですか」
「ち、違うって！」
両手を顔の前で勢いよく振りながら、東雲が叫んだ。
「颯太くんも、どうしてきたの!?」
颯太が拳を顎にあてて腰をひねる。
「えーっ。だってだって、すずねちゃんだけずるいよ〜っ。僕だって星乃さんに会いたいのに、独り占めするんだもん！」
あやめが天井に視線を向けてため息をつく。
「だからって、わざわざここまで来るかしら……」
「だって、こんなチャンス滅多になさそうだし？」
「あの、どうしてここにいることがわかったんですか？」
颯太があやめのほうを振り向いて、携帯の画面を出す。

「すずねちゃん、僕にすーっとリアルタイムで自慢してくるんだよ？　ひどいよね！」
「あああああーっ」
東雲が体を震わせ、颯太の携帯を覆い隠す。
それから、あやめにチラリと視線を送る。
あやめが目を細めてその視線を見つめかえす。
「……裏切者」
「ち、違うのよ!!」
あやめが東雲から顔を逸らして、得意げにニヤリと笑う。
「……へっ」
東雲が呆然とあやめを眺める。
それから勢いよく颯太に顔を向ける。
「あなたが悪いのよ！」
そう言いながら、颯太をぽかぽかぽかと殴った。
「えっ、ぼくぅ!?」

・

・

・

颯太があやめのほうに向き直り、優雅にお辞儀する。

「そういうわけで、改めまして。何度か顔を合わせてるはずですが、山崎颯太です、よろしくね」

あやめが軽く頭を下げる。

「星乃あやめです。よろしくお願いします」

二人の様子を東雲がそわそわと見守る。

「かねてから、星乃さんとは話してみたいって思ってたんだ」

「それは、光栄ですけど……」

颯太が微笑む。

「今年は、ピアノコンクール、出場しなかったんだね」

「……」

「颯太くん！」

颯太が東雲にチラリと視線を投げてから、あやめに向きなおる。

「星乃さんも、普通の人間だったことに少し安心したよ」

あやめが首をかしげる。

「どういうことですか？」

颯太が両てのひらを前に向ける。

「実は、今年は僕もコンクールには出場していないんだ。すずねちゃんもね」

あやめが東雲を振り返る。
東雲が、あやめの視線から逃げるように顔をそむけた。
あやめが再び颯太を見る。
「今日会いにきたのは、お礼が言いたかったからなんだ」
「お礼？」
颯太があやめの目を見つめながら、口元にだけ微笑みを浮かべた。
「去年のコンクール、素晴らしい演奏をありがとう。おかげで、僕は長年の苦しみから解放された」
「……………」
東雲が、向かい合うあやめと颯太の様子を見守る。
「ようやく、勝利のための演奏から離れられた」
あやめが目を細め、表情を隠すようにうつむく。
「あれは、表現を捨てて楽譜をなぞることに撤した演奏だから」
颯太が微笑んだままうなずく。
「そう指示されたとしても、本当にそのまま再現できる星乃さんは化け物だよ」
顔を伏せたまま、あやめの目が泳ぐ。
「なんにせよ、君は勝った。そして、それ以外の人間は負けたんだ」
「……」
あやめがわずかに顔をあげ、颯太の表情を覗くように見上げる。

「すずねちゃんとは同じ大学で同期として出会ったんだ。いつも星乃さんの話ばっかりするんだよ」

「ちょ、ちょっと……」

東雲が気まずそうに颯太とあやめを交互に見る。

「それまでは僕とは違う世界が見えている人なんだろうって思ってたけど、すずねちゃんの話のなかの星乃さんは全然違った。だからずっと話してみたかったんだ」

颯太が東雲に視線を移してからあやめに戻し、もう一度微笑む。

「もう、僕らは敵対するのをやめてもいいと思うんだ。傷のなめ合いでもいいからさ……一人はやっぱり疲れるよ」

「……………」

颯太が、隣におかれたピアノに体を向けて、鍵盤に手を伸ばす。

あやめがその様子を見つめる。

「一緒に演奏したい。それが星乃さんの本心でしょ？」

あやめが目を見開き、東雲に顔を向ける。

東雲は首を勢いよく首を横に振った。

颯太の指が鍵盤を叩き、旋律を奏で始める。

「音楽から離れた君の人生に、その代わりとなるなにかは見つけられたかい？　一分一秒を惜しんで、全てを練習に捧げてきた君だ。音楽

から離れて体は休まってても、心はずっと辛かったんじゃないかな」
颯太の体がリズムに合わせて揺れ、音の一つ一つに芯が通り始める。
「どうせ忘れられないんだ。だったら、走り抜けようよ。最後まで、一緒にさ」
揺れる颯太の背中を、あやめがじっと見つめる。
颯太が東雲を振り返る。
「すずねちゃん、君も加わって」
「え？」
「ほら、ピアノはそこにある」
東雲が自分のそばのピアノを見下ろしてから、ゆっくりあやめに目を向ける。
あやめと視線が交わり、東雲が表情を凛と引き締めた。
それからピアノに向かい、颯太の演奏に寄り添うように音楽を奏で始める。
あやめが二人を黙ったまま見つめる。
「ほら、あやめさんも」
「……え……でも、この曲、私知らない」
あやめが東雲に顔を向ける。
東雲が振り向いて微笑む。

東雲が振り「いっ微笑む

「私も知らないわ」

「え？」

「これは即興だから」

演奏しながら、颯太が微笑む。

「この音楽に決まりはない。星乃さんの感じたものを、好きなように。あなたが願った協奏の形を思い浮かべて。さあ、一緒に」

あやめが、すぐそばのデジタルピアノに視線を向ける。

「…………」

何度かゆっくりと瞬きをする。

「……一緒に、か……」

あやめが体をデジタルピアノに向け、一列に並ぶ鍵盤をじっと見つめる。

目を閉じ、耳を澄ませ、二人の音を感じる。

「いつからだろう」

体が脱力して腕がだらりと垂れ下がる。

その腕をゆっくり持ち上げ、十指を鍵盤に乗せる。

「音楽が目的のための手段になってしまったのは――」

テーブルの下で両手をぎゅっと握ったあやめがうつむいている。

その視点は、テーブルの一点をじっと見つめている。

「それで、もう一度音楽の道に……、大学に、行きたいの」

あやめの正面に座る父親が目を閉じたまま、ゆっくり口を開く。

「お前の覚悟はもうよく知っている。あやめの選ぶ道に異論はない」

父親の隣に座る母親の口元がかすかに動く。

「だから、問いたい」

あやめが顔をあげてうなずく。

「準備はしっかりできたのか？」

「準備……」

「そうだ」

父親が目を開き、あやめの目を見つめ、足元の鞄からルーズリーフバインダーを取り出した。

それをあやめのほうに差し出す。

あやめはその表紙を見つめた。

「みていい？」

父親がうなずく。

あやめがバインダーを開く。

「これって」

これって……」
　あやめがゆっくりページをくっていく。
『面接について』『生活費について』『確定申告について』
　父親の手書きのノートと、参考資料が印刷されたプリントが、バインダーにまとめられていた。
「これからは、音楽だけに集中するわけにもいかない。世間からはもう社会人として見られる。あやめは音楽以外が疎かだったが……、お前は自分に甘いわけではないのは知っている。だからこれをまとめておいた。社会に出るとき、必ず突き当たる問題の対応方法だ」
　父親の声に耳をかたむけながら、あやめはページをめくっていく。
「こんなに、いっぱい……」
　顔をあげて、父親を見つめる。
「俺には、これくらいしかしてやれない」
「そんな」
「お前の貯金も、自分のために使いなさい」
　あやめはバインダーの最後のページまでめくっていった。
　そこには、家族と、ピアノを演奏する小さなあやめが写った写真が貼ってある。
　その写真の少し下に、あやめの涙が一粒落ちた。
　目元をぬぐい、笑顔を作ってから顔をあげ、あやめが父親と母親を

見る。
「お父さん、お母さん、ありがとう。私、頑張るね」

・・・

──來夢学園。
職員がそれぞれ机に向かい作業を進めていた。
その様子を、入り口に車椅子を乗りつけたあやめが眺める。
奥のほうから三国が歩いてきて、あやめの前で立ち止まった。
「待たせたな」
「いえ、お忙しいところすみません」
「大丈夫だ。隣の空き教室に移動しよう」
あやめが三国の言葉にうなずく。
二人が移動し、誰もいない教室で、車椅子のあやめに向かい合うように三国が椅子に腰かける。
「なるほど、そうだったか……」
あやめが三国をじっと見つめる。
「言うことがあるんですか

「信じてくださるんですか？」
三国が両手を前で組み、目を伏せる。
首をかしげたあやめが、しばらく三国を見つめた。
「……星乃。私は君の状況を知ったうえで、情報を伏せている。理由はその『メッセージ』の通りだからだ」
そう言って三国が顔をあげる。
「……」
あやめは目を見開いて、じっと三国を見つめた。
「……あのとき話していたのは……三国先生だったんですね……」
三国が眉をよせる。
「……あの時、話していたとは……？」
あやめが自分の手元に目を落とす。
「あ……えっと……。たぶん、私が昏睡状態のとき……ベッドの横で、よく話していた一人が三国先生だったんじゃないかなって……」
三国が目を丸くする。
「……意識が……あったのか……？」
あやめが小さくうなずく。
「でも、当時はうまく認識できていなくて……最近なんです、そのときの光景をはっきり自覚できたのは」
「……」

「……」

三国が顎に手をそえて顔を伏せる。

うつむいたあやめがおそるおそる視線を三国に向け、再び目を伏せる。

「それで……聞いちゃって……」

三国が顔をあげる。

「……聞いた？」

あやめが俯いたままうなずく。

「その、私は交通事故ではなく……自殺をはかって、それに失敗した結果、昏睡状態になったって……」

「…………」

三国が黙ったまま、うつむいているあやめを見つめる。

「他には？」

あやめが三国の表情を上目遣いに覗き、再び視線をさげる。

「……面会にきていた人たち……たぶん、先生だった人とか、眠っている間の様子とかです」

「……そうか……」

三国が口元を手で覆うようにしながら、床の一点を見つめる。

「いや……すまない……。まずは、そうだな……」

三国が顔をあげて、あやめの視線が自分に向くのを待った。

三国が顔をあげて、あやめの視線が自分に向くのを待った。
顔をあげたあやめと三国の視線がぶつかる。
「……星乃。君の今の心境を、私は計り兼ねる。星乃はその事実を知ったうえで、どうしたいと考えている？」
あやめの目が泳ぐ。
「まずは、自分の状況を明らかにして、前向きに問題解決に挑んでいきたいと、そう思っています」
「……無理や、我慢はしていないか？」
あやめが目を伏せる。
「無理はしていません。ただ、本当にどうするべきかわからなくて。だから知りたいんです、本当のことを。たとえそれが、余命に関わるような事実でも」
「…………」
三国があやめを見つめる。
それから目を閉じて、小さく息を吐き出した。
「わかった」
三国が机におかれたタブレットに手を伸ばす。
慣れた手つきで操作してから、そのタブレットをあやめに差し出した。
あやめがそれを受け取る。

「それは、君の脳の状態や病状の変化を記した当計画用のカルテだ。結論から言うと、当時君は遷延性意識障害と診断されていた。つまり、植物状態だ」
　あやめがタブレットから顔をあげ、三国の顔を覗きこむ。
「……今は違うんですか？」
「まず、その状態から快復を図るため、神経内科学研究機関『エミス』の後援を受けて損傷した脳の補助を行った。いずれ外すものではあるが、君の頭には小さな補助装置が埋め込まれている」
　あやめが目を丸くし、自分の頭部に手を触れる。
「しかし、その装置にできることは限られていた。そこで、無償で多くの支援と治療を受けられるトライメント計画に参加するよう誘導させてもらった」
「…………」
　三国が咳払いをして、口を一文字に閉じた。
　しばらくそうしてから、ゆっくり口を開く。
「突然だが、本題に移らせてほしい」
　あやめが首をかしげる。
「本題？」
「ここまでが、大まかな君の現状だ。しかし、これはあくまで治療の

「ための準備であって、本題は治療方法にある」
「……」
三国があやめを見つめる。
「君の記憶喪失は、治療の際に意図的に残したものであり、手を施すべはまだあった。それを選ばなかったのには、当然理由がある」
あやめがゆっくりうなずく。
「精神病はほとんどの場合、危険信号を知らせるためか、もしくは身体を自己回復させるための活動の結果として、表面化することが多い。つまり、精神を疲弊した星乃にとって、記憶喪失こそが、身体が選択した自己回復の手段の一つでもあったという訳だ」
「……それは、なんとなくわかります」
あやめの言葉に、三国がわずかに目を見開き、ゆっくりうなずいた。
「……我々の見解では、記憶喪失の状態を保ちながら適切な時間をかけて、ボロボロになった脳の快復を促すべきだと考えている。薬や補助装置は病気を直接的に治すのではなく、本来の自己治癒能力のサポートに過ぎないからな」
「……快復の目処は、たっているんでしょうか……？」
「残念ながら、断言できない」
あやめが口をわずかに動かし、目を伏せる。

「経過は順調だった。だが、今日星乃が報告をくれたように、新たな問題が発覚した」
　あやめがタブレットの画面に目を向けた。
「……多重人格」
　三国がゆっくりうなずき、小さくうつむく。
「正確には、解離性同一性障害といってね……一般的には、切り離した感情や記憶が成長して別の人格となって表に現れた状態をいう。だがそれは、一つの肉体に複数の人格が宿った状態ではない。独立した人格のように見えても、それは星乃の一部分だ。それぞれの交代人格は、その人が生き延びるため、必要に迫られて生まれてきたものであり、すべての交代人格はなんらかの役割を担っている。治療方法は、それぞれの交代人格が受け持つ負の感情を和らげ、逆に安心感や信感、なによりも、自信――。――つまり健康な人格を育て、交代人格間の記憶と感情を切り離している障壁をなくしていくこととされている」
　タブレットに目を落としていたあやめが顔をあげる。
「私の抱える問題を解決すれば、脳も快復するということですか？」
　三国がうなずく。
「今回の治療プランは、星乃の精神状態の成長を図り、脳の快復と同

時に人格も一つに戻すというものだった。だが、通常とは異なり、脳へのダメージを最適化する補助装置を設けたことから、トラウマとなるトリガーにも強く反応してしまっている。本来なら、トラウマを抱えた星乃の人格を眠らせたまま、今の星乃がそれを乗り越えられる自信を身につけていけばよかった。星乃の話から察するに、身体が完全に癒えるまでは、ピアノ演奏を避けて刺激は与えないほうがいいかもしれない」

　あやめの身体がピクリと跳ねる。

「これまでの経過快復を見て問題はないと感じていたが、不明瞭な部分も多い。星乃の足の感覚についても、そのうちの一つだ。常に精密な調査を続けているが、治療方法から病状変化まで、すべてが初めてのことだ。申し訳ないが、もう少し時間が欲しい」

　あやめがゆっくり顔を伏せる。

「……そうですか」

　そう言って固く目を閉じる。

　しばらくそうしてから、うつむいたままわずかに目を開ける。

「……どうしても……。どうしてもピアノを……」

　そこまで言って、あやめは口をつぐんだ。

「…………」

　三国が目を細めて、うつむいたあやめを見つめる。

「それがトリガーだとわかっている以上、なるべく……」
あやめが下唇を噛む。
「いえ、すみません。わかりました」
顔をあげたあやめがそう言って、ぺこりと頭をさげる。
「どうぞ、よろしくお願いします」
陽が落ちはじめ、空が橙色に染まる。
人気のない廊下を、あやめがハンドリムを押しながら進んだ。
「……どうして、こんなに……」
そうつぶやいて、下唇を噛む。
自走する車椅子は、やがて一つの教室の前で止まる。
顔をあげたあやめが、教室の名札を見つめた。
……窓から差し込む夕暮れの日差しがグランドピアノを照らす。
「………」
入り口であやめが、その黒い筐体をじっと見つめる。
背中に掛けられたバッグに手をのばし、そこからルーズリーフバインダーを取り出す。

膝の上においてﾞ、表紙に手をかける。
ページを開くと、書きかけの楽譜が目に入った。
「……」
「じっと見つめるあやめの表情が苦々しく変わる。
……私は……。……あの人に……並べないのかな……」
あやめは、パタリとバインダーを閉じた。

・
・
・

——2034年、8月。
運転席に座るあやめがハンドルを握る。
助手席には母親が、後部座席には父親が座っている。
「まさか、こんなに早く親孝行をされるとはな」
父親が窓の外を眺めながら言った。
「まあ、貯めてたお金が浮いちゃったからね」
「まったく……」
母親が微笑み、『長野へ旅に』と書かれたパンフレットを膝の上で開いた。

　エンジン音がしばらく続く。
「……そうそう、あやめ。あなたがピアノを始めたときのこと、覚えてる？」
　あやめが視線を一瞬母親に向け、再び前を向く。
「え、なんだろう、おもちゃで遊んでたことくらいなら……」
「そうね、あやめはずっとピアノのおもちゃで遊んでた。うちには音楽をやっていた人はいなかったから、おばあちゃんがピアノを演奏しているあなたを見て、天才だって騒ぎ立てたのよ。それで、おばあちゃんが昔ピアノ教室を開いていた地元の知り合いにかけあって、あなたを通わせたの」
「そうだったんだ……」
　ふふっ、と笑った母親が窓の外に目を向ける。
「おばあちゃん、あなたがピアノを演奏しているときはいつも嬉しそうにしてたわ」
「そっか……」
「ちなみに、お父さんもね」
「おい」
　あやめの顔に微笑みが浮かぶ。
　ハンドルをとんとんと指で叩きながら、口を開く。

「いつか、みんなを招待して――」

・　・　・

ベッドに横たわるあやめが暗闇の中、天井に手を伸ばす。
しばらくそうしてからゆっくり手をおろし、顔を横に向ける。
反対側のベッドで眠る翔が視界に入る。
「…………」
暗闇に溶けこんでいる翔を、あやめがじっと見つめる。
眉をよせ、歯を食いしばり、翔に手をのばす。
「……翔……」
その指先から力が抜け、目を伏せたあやめが涙を浮かべる。
「翔……」
伸ばした手がさがっていく。
そのまま手を引いて、しがみつくように布団を抱きしめる。
「ごめんね、翔」

・・・

――――――――――。

「なんだ？」

目の前の対向車線から大きな打撃音があがる。

あやめと母親、父親がいっせいに顔を向ける。

三人の視線の先で車が跳ねあがり、あやめの走行する進路に投げ出される。

見開いたあやめの瞳に、浮き上がった大型の車が映りこむ。

「――っ!!」

咄嗟にあやめがハンドルをきる。

車は避けるように壁際に進むが、跳ね飛んだ車が向きを変えてあやめたちの車に襲いかかる。

「あやめ!!」

――――。

――――。

――。

母親があやめを引き寄せる。

大きな音をたて、フロントガラスが破裂する。
遅れてくぐもった低音が車内に突き刺さり、車体がアスファルトにこすれる音が鳴り響く。
火花と鮮血が青空にくっきりと舞い散る。
時が止まった惨状を前に、すべてが静まり返る。
後方につかえていた車から人々がおり、その様子を見つめる。
やがて、騒然が波のようにひろがっていく。
燃え上がる大型車と、それに押しつぶされてぺしゃんこになった乗用車。
その車中で、手がだらりと垂れる。
赤く染まった視界の中で、炎がゆらゆらとゆらめいていた。
やがてその瞳はゆっくりと閉じられる。
温かい、鮮血に包まれて――

・　・　・

――暗闇。

あやめが涙で濡らした目蓋を閉じ、寝息を立てている。

ベッドからわずかにはみ出た手に、手が重なる。

あやめの前髪が優しく撫でられる。

「……大丈夫」

闇の中に、翔の優しい声がひろがる。

「大丈夫だよ、あやめ」

翔があやめの手を両手で包む。

「ありがとう」

微笑んだ翔がゆっくり手を離し、あやめの手を布団のなかにしまう。

音を立てないように振り返り、自分のベッドに戻っていく。

やがて、小さな衣擦れの音が届いた。

布団に包まるように、翔が横になる。

片翼の標

東から登った太陽が、人気のない海岸に影を伸ばす。
波の満ち引きが水面に浮かぶ桜を巻き込んでいく。
広大な海を背に立つミリャが、正面の司をまっすぐ見つめる。
「…………」
司もじっとミリャを見つめながら、わずかに開いていた口をゆっくり閉じた。
ミリャの髪が潮風に揺られる。
顔にかかった髪をかきあげて、ミリャが微笑む。
「聞きたいこと、聞いてもいいよ」
司がすこし目を伏せる。
砂浜が波に濡れ、渇き、また波が寄せてくるのをぼんやり眺める。
しばらくそうしてから、司が顔をあげてミリャを見つめた。
「その、どうして話せないフリをしていたの？」
ミリャが上着のポケットに両手を入れる。
「そうだな。ミリャ・ブランコは喋れない、という認識があった方が動きやすかったから、かな。でも、私が話せるようになったのは本当

に最近。司くんと、例の廃墟で目覚めた、あの日から
「え？　じゃあ、持病を抱えていることは、本当なの？」
「うん、そうだね」
「……………」
　司が腕を組み、片手で口に触れる。
「私は、基本的に今後も話せないフリを続けると思う。ここで私が司くんに正体を明かしたことには、理由があるんだ」
　司が口元から手を離し、ミリャを見つめる。
「それは、なんだろう」
　司から視線を離さず、ミリャが微笑む。
「一言で言えば、私の目的に協力してほしかったから」
「目的……。具体的な内容も、説明してもらえるのかな」
「もちろん。ただその説明の前に、司くんにとってメリットであることと、デメリットであることを話そうか」
「メリットとデメリット……？」
　ミリャが片方のポケットから手を出し、司の目の前で人差し指を立てる。
「まず、メリット。司くんの追っていた幽霊の正体と、あなたの記憶の違和感の正体、その二つを明かす助けになるかもしれない」

そう言ってからミリャがもう片方のポケットから手を取り出し、同じく人差し指を立てる。

「次に、デメリットだけど、今の日常が続かないかもしれない。そして、知りたくなかったことまで知ることになるかもしれない」

「……」

司が黙ったままミリャを見つめる。

ミリャが両手をおろして微笑んだ。

「それが怖ければ、今日のことは忘れてほしい。そして、今まで通りの生活を送っていこう。もし、私の話を聞いてくれるのであれば、司くんの普段の日常の中で、少しだけ時間を借りて協力してもらうことになると思う。どうかな」

日向子が広げていたノートを閉じ、タブレットと一緒に鞄にしまう。

椅子から立ち上がり、教室の外に出ていく人々に続いて廊下に出る。

ぞろぞろと歩いていく人々のうしろを日向子がのんびりと歩く。

「ふぅ」

「ふぁぁ……」
口を押えながら欠伸をする。
「ふおおおおお――」
後ろからバタバタと足音が聞こえ、日向子が振り返ろうとしたとき、ももが日向子の腰に抱きついた。
「うひゃいっ⁉」
「日向子さん、確保――――っっ」
「はえっ⁉　ももちゃん⁉」
周囲の人々が日向子とももに視線を送り、再び歩き出す。
ももが日向子の腰から手を離し、一歩下がって両手を自分の腰に当てる。
「ぐっいぶにんっ、日向子さん。お昼ご飯、一人ですよね。わかってます、わかってますよー。しょーがないですからももちゃんが付き合ってあげます！」
自分の言葉に、ももがうんうんとうなずく。
「あ、うん。ももちゃん、今日はお昼一人なの？」
「一人になってきたところですっ！　決してももちゃんはぼっちではありません！」
「そ、そっかぁー。一人ぼっちの私に声をかけてくれるなんて、ももちゃんは優しいなぁー」

「そうでしょう、そうでしょうっ。もちろんパンも買ってありますよ。さあさあ、ももちゃんと仲良くお庭へ行こうじゃないですかっ」
教室から出てきた流花が、日向子へ手を上げる。
「お、日向子、まだここにいたんだ」
日向子とももが振り返ると、教室から出てきた流花が二人のほうに歩いてくるのが見えた。
「ってか、ももじゃないか。どうした、こんなところで」
ももが日向子の腰に抱きつき、流花を見上げる。
「うわっ、ぅわ――っ。なんですか、流花。パンは二人分しかありませんからね!!」
「あたしと日向子の分だろ？　ありがとう、ももは優しいなあ」
「ヒェ―――ッ。カツアゲです！　カツアゲですよ、これは!!」
ももが日向子のうしろに隠れる。
「ああ、大舘さん。どうしよう、中庭でみんなで食べてもいいかな？」
「あたしは構わないけど、いいのかい？　もも」
「ダメに決まってますぅ――！」
「おお、すまんね。じゃあ、あたしは購買でパン買ってくるからさ。日向子、なんか欲しいものある？」
日向子が背後のももを見下ろすと、

日向子が背後のももを見下ろす。
「ももちゃん、パンのお礼になにか、ももちゃんの好きなもの買うよ。なにがいい？」
「では野菜抜きチーズチキンカツをお願いします」
「りょーかい。じゃーまたあとで」
「ちなみに、そんなものの購買には売ってません!!」
流花が手をあげて、廊下の奥に歩き去っていく。
ももが日向子の腰から顔を出してその背中に視線を送る。
「…………」
「あー……その。野菜が入ってないといいね？」

中庭のテーブルに、日向子とももが向き合って座る。
「気になりませんか。最近のお二人」
日向子が口に付けていたペットボトルを離し、テーブルに置く。
「ミリャちゃんと、新田くん？」
「そうです。どこへ行っても二人ペアなんですよ」
「うーん、新田くん優しいからね。三国先生にも面倒を見てほしいってお願いされたみたいだし」

「あら。そ一なんですか？」
「うん」
　ももが視線を横に向ける。
「そ、それはともかくですね。耳寄りな情報がありますよ、日向子さん！」
「情報って……二人の？」
「はい！　とある筋から、二人が先週の土曜日に仲良く下月海水浴場へ向かって行く姿を見たとの情報を得たんです！」
　日向子がキョトンと目を丸くして首をかしげる。
「あれ、そうなの？」
「そうなんです！」
　日向子が腕を組み、目を閉じてうなる。
「ミリャちゃん、朝学園のほうを指さしてたのにな……」
「ほら!!　あやしい!!」
「うう一ん……」
　ももが椅子に座りなおし、日向子を見つめる。
「そこで！　日向子さん。もう分かりますね？」
「もしかして……　また廃墟まで行くの……？」
「いえいえ。正直、廃墟にはもうそんなに興味を示していません」
「[illegible]

「そうなの？」
　ももがうなずく。
「それでいて、今回は司を尾行したいというわけでもありません」
「それじゃあ……ミリャちゃん？」
　首をかしげながら日向子が聞いた。
「です！」
　ももが両腕を組み目を閉じる。
「最近のミリャの行動からは、とても明確な意思を感じる気がするんですよね」
「…………」
「それに、ももちゃん、ミリャが自由学習中に勉強している内容がすごく気になっていて」
　日向子が目を丸くする。
「ミリャちゃん、なにか勉強しているの？」
　ももがうなずく。
「植物や動物を対象にした生物学ならそこまで気にならなかったんですが、どうやらももちゃんと同じ専門分野を勉強しているみたいでして」
「……ももちゃんと同じって、つまり……」
　日向子が眉をひそめる。

「人工の……えっと……ロボット博士……？」
「人工知能ですよ！」
「ああ、そう、それそれ……！」
もものジトッとした視線を受けて、日向子が苦笑いを浮かべる。
「おーい、お待たせ」
声がしたほうを二人が振り返ると、ビニールを袋をぶら下げた流花がすぐそばに歩み寄ってきていた。
流花がビニール袋をテーブルにおく。
「なんの話してたの？」
「流花には関係のない話でーす」
「ほう、そうか」
流花がビニールからチキンカツサンドを取り出し、自分の手元におく。
それから、野菜たっぷりサンドイッチを取り出してももの目の前においた。
「ちゃんとチキンカツとチーズ入ってるから。それで我慢しな」
ももがサンドイッチを凝視する。
「野菜なんですがこれは」
「そうだな」

「わーん、日向子さん。流花がいじめますぅ」
ももが日向子に泣きつく。
「あはは……」

・　・　・

街道を司とミリャが歩いていく。
その様子を、遠くの影に隠れた日向子とももが見守る。
「うう……二人ともごめんなさい……」
「あっ、日向子さん、お二人が移動しましたよっ。追いかけましょう！」
ももが日向子の裾を引っ張りながら小声で言った。
「う、うん……」
二人がたどり着いたのは街のバス停だった。
「これはまずいですね……。バスを使われると追跡が難しいです。日向子さん、バスが来ない今のうちですっ」
日向子を振り返ったももが言った。
「へ？」

「車で追跡するんですっ」

「え、ええ――っ」

「休日のみならず、平日の放課後から二人で逢引ですよ！この行く末を確認せずどうするんですかっ」

日向子が眉をよせ、目を細める。

「と、当然です!!」

「……本当にミリャちゃんが気になるだけなんだよね？」

目を泳がせながらももがこたえた。

「……しょうがないなあ」

・　・　・

日向子が車の運転席に座りハンドルを握る。

助手席に座るももは前方のバスを凝視していた。

赤信号でバスが停車し、そのうしろに着けるように二人の車もとまる。

「そういえば、ももちゃんと仲良くなったのも、新田くんを一緒に尾

行したのがキッカケだったよね」
「あれ、それが始まりでしたっけ？　なんだか懐かしいですね」
「よく尾行とかしてるの？」
「はい！　人に限らず色々と。謎を追いかけるのは、ももちゃんがなにかを始める原動力でもありますからね」
「そっか……」
日向子が微笑む。
「まぁ、そういうお手伝いができているのなら、よかったのかな……」
日向子の穏やかな微笑みが、ゆっくり顔から消えていく。
「……いいのかな？」
青信号になり、バスが進み始める。
日向子がブレーキペダルから離した足をアクセルペダルに乗せて踏み込む。
「日向子さんは、なにか気になっていることとかありますか？いつものお礼といってはなんですが、ももちゃんがそれとなく調査しておきますよ」
「えっ……気になってること？」
日向子が、視線を一瞬ももに向ける。
「うーん……そうだなぁ……」

日向子が視線を前方に戻してつぶやく。
「やっぱり……ミリャちゃんの病気のこと……かな」
「ああ、なるほど」
ももが視線をあげる。
「病気となると専門外なのでなかなか難しいですが……」
フロントガラスの上部をぼんやりと眺めながら、ももが小さくうなずく。
「わかりました。できる範囲で調べてみますねっ」
「ええっ、いいよいいよ！　言ってはみたものの、原因不明で誰も解明できてないみたいだからっ」
ももがほうほうと呟きながらうなずく。
「まあ、できる範囲なので。日向子さんには日ごろお世話になっていますから、任せてください。ももちゃんもミリャにはよくなってほしいですからね。ミリャも同じ想いだとすれば、なおさらです」
ももが満足げな微笑みを浮かべながら言った。
日向子もはにかんだように優しく微笑む。
「ありがとう、ももちゃん」
「いえいえっ」

・・・

バスが停車し、司とミリャがおりる。
その様子を、うしろにつけた車の中からももと日向子が見つめていた。
「あれっ!?　お二人、ここでおりてますよっ！」
日向子が、歩く二人の背中を見つめ、その道の先をぼんやりと眺める。
「あれは、どこ向かってるんだろう……この先ってなにかあったっけ……」
「と、とにかく追いましょうっ。あわわ、車どうしましょうっ」
日向子が車のハザードボタンを押し、方向指示器が点滅する。
「ももちゃん、おりていいよ。私、駐車できるところ探して追いつくから」
ももが遠のいた司とミリャの背中を目で追ってから、日向子を見る。
「すみませんっ。車、任せましたっ」
扉を開けて歩道におり立ち、タブレットを助手席におく。

「こちらに向かう際はトトを頼てください！　それでは！」
「うん、またあとでっ」
日向子に手を振りながら、ももが駆けだした。

……司とミリャが街道を歩く。
その後方をこそこそと進むももが、物陰から二人の背中を見つめる。
「ももちゃんっ」
「あ、日向子さんっ」
ももが振り返ると、息を上げた日向子が胸に手をおいて呼吸を整えていた。
「お、お待たせっ。……新田くんとミリャちゃんは……？」
ももが司とミリャのほうを指さす。
「大丈夫です。ちゃんと追跡できています」
日向子が、ももの指さしたほうに顔を向ける。
のんびり歩いているミリャと司の背中が見えた。
「ふーむ、今日は廃墟のほうへ行くわけではないんですね」

日向子の持つタブレットからトトの声が聞こえ、日向子が手元に目を落とす。
「あ、ももちゃん、トトちゃんお返しするね」
ももが日向子からタブレットを受け取る。
「あっ」
日向子の視線の先で、二人が角を曲がる。
ももが振り返り、細めた目で二人の姿をとらえる。
「曲がりましたね」
日向子とももが目をあわせうなずき合う。
ももが一足先に駆けだし、二人は曲がり角に向かった。
……角を曲がった先には、シャッターの閉じられた建物が連なって並んでいた。
ももがきょろきょろと見渡す。
「あ、あれ。どこいったんでしょう……」
「あ、あそこっ」
もものうしろから、日向子が指をさす。
ももがその先に視線を送る。
司とミリャが、薄ピンクの外壁の、奇抜な形の建物に入っていく。
「あっ、あの建物に入ったみたいですねっ」
ももが二人を追いかけて、ピンクのお城の入り口に駆け寄ってい

く。

「あれって……」

　ぴょこぴょこと駆けるももの後ろ姿越しに建物を眺めながら、日向子がつぶやいた。

　カラフルに彩られた建物の外壁は老朽化が進み、所々塗装が剥がれ落ちている。

　建物のそでに建てられた大きな看板には、ご休憩、宿泊と書かれている。

　日向子とももが建物を見上げる。

「なんですかね、ここ。大分古い建物のようですけど……。もしかして、司は廃墟マニアとかなんですかね？」

　そう言ったももが、日向子を振り返る。

「ん？　日向子さん？」

　頬を赤らめてわなわなと唇を震わせていた日向子が、ハッとももに顔を向ける。

「も、ももちゃんッ！」

「はい、どうしました？」
「帰ろうか……」
日向子の言葉に、ももが目を丸くする。
「えっ！　ど、どうしてですか！　ここまできたのにっ」
「あ──、はいはい。なるほどなるほど──」
手元から声がして、ももがタブレットに目を落とす。
画面の中でトトがウィンドウを開き操作している。
「あのやろ──、ついに正体表しちゃいましたね」
ももが首をかしげる。
「え、なんですかトト。教えてください」
「はい、その建物は──」
日向子が勢いよく、タブレットの画面に手のひらをかぶせる。
ももがポカンと口を開けて日向子を見上げる。
「え、えっと、車の中で説明するからっ、この場所のことはっ！　一旦離れよう、ももちゃん」
引きつった笑みを浮かべながら日向子が言った。
首をかしげながら日向子を見上げていたももがゆっくりうなずく。
「むぅ、──先ずわかりました。あとでちゃんと説明してくださいよ！」

日向子とももがシャッター街を抜け、角を曲がっていく。ピンクのお城の前の看板から顔を出した司とミリャが、二人の背中を見つめる。

「行ったみたいだね」

「人気者だね—、司くん」

「学園七不思議の一つ、ミリャ・ブランコさんには負けるよ」

「君も幽霊探しの新田くんだからね」

互いに肩をすくめ合ってから路地に出て、北のほうを眺める。

「それじゃ、行こうか」

——廃墟の廊下を歩く司とミリャが、扉の前で立ち止まる。

司が手をのばし、その扉に触れる。

「…………」

ミリャが司の手を掴み、司を見上げる。

「あ、ごめん」

司が手を引き、ミリャが扉の取っ手を掴み、ゆっくり開いていく。
開いた扉から司とミリャが部屋の中に入る。

「やっぱり、いないみたいだね」

部屋の中に進んだ司が周囲を見渡す。
グランドピアノに目をとめ、ゆっくり歩み寄って手を触れる。

「ここにおいておこう」

司がショルダーバッグから手紙を取り出し、グランドピアノの上蓋の上におく。
その様子を眺めていたミリャが、司の隣まで歩く。
司がおいた手紙の横に手に持っていた花瓶をおき、花の向きを整える。

「フリージア。きれいな花だよね」

「うん。この島でよく見かける」

つぶやくようにこたえた司が、ピアノの上の手紙をぼんやり眺める。

「アイは、どうして急に俺のことを避けるようになったんだろう」

ミリャが顔をあげて、司の横顔をじっと見つめる。

「…………」

しばらくそうしてから、ゆっくり視線を移してベッドを見下ろす。

「司くんが自分の過去についてアイに聞いたとき、司くんは自身が

……司くんが自分の過去についてアイに聞いたとき、司くん自身がその答えを望んでいないからと、答えなかった。状況からして、司くんの記憶の欠落は、覚えていないその過去に起因しているんだと思う。もしかしたらそれは、司くんが忘れたかった過去……なのかもしれない」

司は無表情のまま、手紙を見つめ続ける。

「そんなに、酷い過去なのかな」

司の目線がわずかにあがる。

「向き合って前に進むしかないと思うんだけど」

ミリャが振り向いて司を見上げる。

「……。状況的に、あの日自立した君の『もう一つの人格』と、アイは話したんじゃないかな。そして、なにかに気づいたんだ」

司がミリャに顔を向ける。

「……。自分のことのはずなのに、ここまでサッパリわからないとはね」

司が苦笑いを浮かべる。

「……司くんは今、どんな気持ちなの？」

「ん」

自分を見上げるミリャの視線を見つめ返してから、司は口に手を当てて考える。

「君の言う通り、問題を解決することが先決だという気持ちかな。そこに、私情を挟むつもりはないよ」
司がミリャを見下ろして微笑む。
「……そっか。わかった、私も頑張る」
顔を伏せたミリャが静かに言った。
部屋の窓にアイが顔を近づけ、去っていく司とミリャの背中を見つめる。
二人が森の中に入り背中が見えなくなると、アイがゆっくり窓から離れる。
グランドピアノの袖にゆっくり歩いていき、上蓋におかれた手紙を手にとる。
しばらくそれを見つめてから顔を上げ、飾られた花を見つめる。
「……きれい」
伸ばした左手で、優しく撫でるようにフリージアの花弁に触れる。
「……こういう気持ちだったのかな、お姉ちゃんも」
そうつぶやいたアイが手紙を持ってベッドに腰掛ける。
手紙の封を開け、中から便箋を取り出し、目を通す。

手紙の封を開け、中から便箋を取り出し、目を通す。

「……‼」

目を見開いたアイが、便箋を一枚ずつ読み進める。

「ああ、そうか」

手を止め、脱力した腕をだらりと落とす。

「……君は、そういう選択をしたんだね」

・・・

強い陽の光が窓越しに教室を刺す。

生徒たちは机にタブレットをおき、ノートにペンを走らせている。

頬杖をついて、重そうな目蓋を必死に持ち上げる生徒もいる。

壇上の伊砂が、背後の黒板に映し出された画面を切り替え、口を開く。

「授業でもプレゼンテーションを行いましたが、基本は同じ、成否を分けるのは事前準備です。彼を知り己を知れば百戦殆うからず。商品を売るターゲットを理解し、自らがプレゼンする商品を理解すること、それが面接の基本になります。つまり、相手を知り、自分を知る

こと。これが大切だということですね」

　伊砂が壇上のボタンを押すと、黒板に映される画面が切り替わり、別の図が表示される。

「まずはターゲットを徹底的に調査します。相手の求めているもの、相手の規模、ニーズなど調べられるものを全て調べます」

　伊砂が教室を見回し、頬に軽く手を添える。

「そうですね……。仮に、エイリアンが地球にやってきたとします。そのとき、人々は未確認生命体を恐れるわけですが、そのエイリアンがウサギの姿をしていたらどうでしょうか」

　伊砂がもう一度教室を見渡す。

　生徒たちが怪訝な表情で首をかしげ、教室が妙な雰囲気に包まれる。

　五十嵐が手をあげる。

「うさぎは先生の趣味ですか？」

　伊砂が口に拳を当て、コホンと咳払いする。

「つまり、知らない相手と対峙するのではなく、事前準備によって知っている相手に変えてしまうのです。相手のことがわかれば、自然と自分ができることもみつかると思います」

　再び伊砂が壇上の端末を操作する。

黒板の画面が切り替わる

黒板の画面が切り替わる。

「自分自身については……そうですね。例えば、自分に聞こえている声と、相手に届いている声は、印象が全く異なるというのはご存知でしょうか。自分の姿や声を、客観的に知っておくのも大事なことです。動画や音声を撮ることで、意外と自分には見えていなかった部分が多く見えてきます。世の中、自分の認識しているものが必ずしも正しいものとは限らない。故に、調査が必要なのです」

……黒板に映る画面が消灯し、通常時の黒板の様子が露になる。

壇上に立つ伊砂が、端末の電源を切り顔を上げる。

「授業は終わりになりますが、ここで皆さんに一つ連絡があります」

伊砂が一枚のプリントを取り出す。

「御雲島の観光協会の方々から、観光ツアーのモニター調査の案内がきています。当調査は、軽い面談はありますが専門性を問われず拘束時間は一日限り、報酬も支払われます。このクラスからは一人だけ希望者を募ることになっているのですが、興味のある方はいらっしゃいますでしょうか」

教室がわずかにざわめく。

伊砂が壇上から教室を見渡す。
日向子がおずおずと手をあげ、伊砂が日向子に目を向ける。
「あ、あの。私、興味があります」
伊砂がうなずく。
「箒木さん、ありがとうございます。このあと詳しい内容を説明しますので、他にも興味がある方がいましたら教室に残ってください。では、授業を終わりにします」

教室の前方で、日向子ともう一人の生徒が伊砂の説明を熱心に聞いている。
その様子を、後方の席の司が見守っていた。
しばらく眺めてから立ち上がり、ミリャが座っている席に歩いていく。
ミリャを囲んで、ももと理人が立っていた。
理人が司を振り返り微笑む。
「このあと別教室でゲーム制作の説明をしようと思うんだけど、いいかな。さっきの伊砂先生の話が気になってれば少し待つけど、みんな
ここ

大丈夫？」
司とも、ミリャがうなずく。
「それじゃ、今日もよろしく頼むよ、理人」
司がミリャに視線を向けてから、理人に顔を向ける。

誰もいない教室の机を繋いで、四人が向かい合って座る。
それぞれの前にノートパソコンがおかれている。
理人が鞄から携帯端末を二つ取り出し、机の中央のタブレットを操作する。
「どう、パソコン映った？」
司がノートパソコンの画面を覗きこむ。
「うん、見えてるよ」
「よし。もうちょっと待ってて」
理人が携帯端末を操作しているのを横目で見てから、司がノートパソコンのディスプレイに視線を戻す。
『御雲島レポート』と書かれた画面が表示されていた。
「これって、例の課題のやつ？」
「そそ一」

「ほぉ」
画面を操作している司が横からの視線に気づき、振り返る。
「ヒェッ」
ももと司の視線がぶつかる。
顔を赤らめたももが手元のノートパソコンに視線を移す。
「？」
しばらくももの横顔を見つめてから、司も画面に視線を移す。
「うん、おっけ一かな」
理人が手に持っていた携帯端末を机においた。
三人の視線が理人に集る。
「早速、ＡＲゲ一ムの基盤ができました」
机を囲んで、四人が黙々と作業を続ける。
司が画面をじっと見つめてから顔をあげた。
「理人、一応それぞれの特徴はまとめてみたよ」
「お、早いねえ」
理人が立ち上がり、司のうしろに回り込む。

「第二地区がないぶん楽だったかな」
前屈みになった理人がマウスを操作して、画面を何度か切り替える。
「うん、いいね」
理人が身を起こして腕を組む。
「僕のほうでは中間ポイントを桜公園と風見坂トンネル展望台に、最終ポイントをひすがら草原へと設定してみたよ。第二地区も使えるなら山頂付近は外せたんだけどね。まあ、頑張ってくれたまえ」
「なんとかなるでしょ」
理人が大きく伸びをする。
「とまあ、あとはパソコン教室でシミュレーションをして、明日また確認かな。この分だと予定より早く終わりそうだし、後期になって第二地区が解放されたら、内容を変えてテストをしてもいいかもね」
「今日はもう終わり？」
「僕がパソコン教室いってプログラムを走らせてくるから、みんなは自由にしてもいいよん」
ももがガタリと立ち上がる。
「で、では司！」
司がももを振り返る。
ミリャと理人も、ももに顔を向けていた。

「ももちゃんとこのあと、ご飯に行きましょう！」
ももが司の近くにずんずんと歩み寄り、肩を掴む。
そのまま、ミリャに顔を勢いよく向ける。
「ミリャ、今日は司を借りますからね！」
司がミリャに顔を向ける。
ミリャが手を振る。
司が呆然とももを見上げる。
「え、なに？」
ももが司を見下ろして、大きく息を吸い込む。
「容疑者、確保です！」

まばらに席が埋まっている食堂で、唐揚げ定食の乗ったお盆を持ったももが席を探す。
司がそのあとを、生姜焼き定食を運びながらついていく。
ももが空いてるテ一ブル席の一つに歩み寄っていく。
「!!」
テ一ブル席の直前でももの動きが止まる。

その場で踵を返す。
「おい、どうして無視するんだ」
ももの背中に流花が声をかける。
ももはそのまま司の目の前まで歩いていき、ニッコリと微笑んだ。
「ささ、司。あっちの席に行きましょう」
司が目を丸くして、ももと流花に交互に目を向ける。
「一緒に食べないの？」
「ンンー？　ナンノコトデスカー？？」
流花が音もなくももの背後に忍び寄り、リュックサックのふたを開ける。
「のわーーー！」
流花はももの叫びを無視してタブレットを取り出し電源を入れる。
ももが勢いよく振り返る。
「どわっしゃーーー‼　召喚に応じて馳せ参ず‼　よくぞ私を起こしてくれましたね、マイマスター‼」
ももの手が届かないように、流花がタブレットを両手で高く掲げた。
「なっ、なっ、なにしてくれてやがるんですか‼　勝手にももちゃんのトトを呼び出さないでください！」
画面の中のトトが両手を腰にあてる。

「いいえいいえ。今日ばかりはナイスな判断ですよ。私が責任をもってこのお二人の仲を切り裂いてしんぜよう！」
流花がタブレットの電源ボタンに手をかける。
「ちょっ、おまっ！　や、やめるです！　まだ登場したば――」
タブレットの画面が消灯した。
それを流花がももに差し出す。
「はぁ、わかりましたよ。まったくもう、流花は寂しがり屋ですねぇ」
流花がタブレットでももの頭を軽く叩き、鞄の中にタブレットを戻す。
ももはお盆を持ったまま俯いて、目に涙を浮かべた。
流花が司に視線を移して、かるく手をあげる。
「悪いね、邪魔して」
司、お膳を持ったまま肩をすくめ、苦笑する。

四人がけのテーブルを、司と流花、ももの三人が囲む。
司とももの前には定食がおかれ、流花の前にはなにもなかった。

「大体、流花はこんな時間にどうしたんですか。いつもなら今頃勉強に夢中な時間帯じゃないですか」
「今日は日向子がいなかったから、昼食を抜いてたんだよ」
ももが視線にあごに手を添えて、視線を上に向ける。
「あぁ……ナイトツアーのモニター調査でしたっけ。日向子さん、このところ積極的ですよね」
「そうだな。この前は就職講談に出てほしいって伊砂先生に頼まれてたよ。日向子は就職活動経験者だからね。そこで得た経験や感じたことを島の子たちの前で講話するんだと」
「ほー。なんというかそれは、すごく頑張っていますね」
「環境もあるけど、本人の努力がやっぱり一番だよね」
司が生姜焼きとごはんを口に運ぶ。
「というか、二人こそどうしたのさ。休憩中？」
「今日は理人の活躍により早く終わったので、司を拉致って糾問を……」
ももが手に持った箸で流花を指す。
「そうですっ。この際ですから、流花にも審判していただきましょう！」
「おい、箸で人をさすな。行儀悪い。して、審判とは。容疑者はどこに？」

い？」
口角を少し上げて、流花が楽しげに微笑む。
司が左手をあげる。
「俺らしい」
流花が司に顔を向けて腕を組む。
「新田くんも大変だな」
司が苦笑いを浮かべた。
流花がももに視線を戻す。
「で、罪状は？」
ももが咀嚼していたご飯を飲み込む。
「ざ、罪状は」
ももが司に視線を向ける。
司と目が合い、ももがすぐに視線を逸らす。
「ま、まあ、まだ罪を犯したと決まったわけではありませんからね。事情聴取からいきましょう」
「なんだそれは」
「いいのです！　さあ、司。昨日あなたは放課後、どこで、な、なにをしていましたかっ」
司が食べ物を飲み込んでから視線を上に向ける。
「昨日は……、ミリャちゃんとゲームに必要な島の情報集めに、第一

地区の東側を調査してたかな」
　ももがキョトンと目を丸くする。
「そ、そうだったのですか。なるほどなるほど……。そこで、なにをしていましたか？」
「え、だから、調査だけど……」
　ももの頬が赤らむ。
「なにをっ、調査してたんですかっ」
「えぇ……理人に指示された島の情報だけど……。ゲームに必要だからって」
　流花がももの肩をぽんと叩く。
「もも、気になることがあるなら、ハッキリ聞いてみたらどうだ？」
　もも、肩に手を置かれたまま、司の方をみて息を荒くしている。
「そうですね……」
　ももが身体を引いて背筋を伸ばし、深く深呼吸をする。
「ふぅ……」
　頬を赤らめたまま、司をまっすぐ見つめる。
「司」
「うん」
「司は、昨日、ミリャと、その、ら、らららららららら。ララーラ〜♪

・」
流花のチョップがももの頭のてっぺんに入る。
ももが両手で頭を押さえる。
顔をあげてから、ごほんと咳払いをした。
「すぅ――はぁ―――」
ももがキッと、キッく司を見つめる。
「司、昨日ミリャとラブホテルに行ってたんじゃないですかっ⁉」
流花が口を開けたまま固まる。
テーブルのコップの中で氷が溶け、カランと音を鳴らした。

・
・
・

机に向かった司がタブレットを操作する。
しばらく画面を眺めたあと、となりにおいたのノートのページをめくる。
『まとめ』と表題が書かれたページを開き、内容を目で追う。
ノートを閉じてから、背もたれに体をあずけ小さくため息をついた。

「理人、終わったよ」
司が声を掛けると、二段ベッドの上段から理人が顔をあげた。
「んあ――？」
寝そべりながらタブレットをいじっていた理人が、寝返りを打って司に体を向ける。
「理人に貰ったノート、一通り全部目を通した」

ゲームのコントローラーを持った司と理人が、テレビの前であぐらをかいて肩を並べる。
「しかし、想像以上に司がゲーム制作に絡んでくれて僕は嬉しいよ」
司が画面を見つめながら、コントローラーを操作する。
「自分でも結構驚いてるよ。そういう趣味とかなかったから」
「どう？　このままゲーム制作の世界にきてもいいんだよ？」
「それはっ……どうかなあ」
司が前かがみになりボタンを押し込む。
理人、だらりとした様子で慣れた手つきでボタンを押していく。
「そろそろ、何かしら見えてきたかい？　この先の選択肢とかさ」
「どうかな

とうかな」
司がコントローラーを操作する手を止める。
「仕事にする未来図までは見えていないけど、プログラムやシステム作りには結構興味を持ってる」
「ほほう」
「技術を身につけてなにかに活かしたいなって……そんな感じ」
「へえ。なんというか、司らしいね」
「……俺らしいか」
理人がボタンを連打し、やがてコントローラーをおろした。
それにあわせて司もコントローラーを持つ手をさげる。
「司はもう、**対戦**ゲームはやらないんだっけ？」
「ん？」
司が理人に一瞬視線を送ってから、再び画面に目を向ける。
「ああ。やってもいいけど、**絶対**理人に勝てないぞ？」
「初回からあんだけ連勝したクセにどういう謙遜の仕方だよ、それ」
「アレはなんていうか、初めてゆえの偶然、ビギナーズラックだよ」
「格ゲーで？　ないない!!」
理人が足を投げ出して、両手に重心をあずける。
「まあ、司が協力プレイがいいって言うんだったら、そうするけどさ」

司が小さく俯く。
理人は司の横顔を眺めた。
「そうだ、またミリャちゃん連れてきてよ。あの子、めっちゃゲーム強いじゃん」
「ああ、そういえばそんなこともあったな」
司が手元のコントローラーをぼんやりと見つめる。
「それにくわえて、ももちゃんが認める有力研究者だからなあ。すごい人の近くにはすごい人が集まる。それを最近、強く実感してるよ」
「…………」
司がコントローラーを床においた。
「逆に、そういう人がよりついてくれないと、生涯を井の中の蛙で過ごして横暴になるわけで。そういうのもなんか、人間のあれよね」
司が理人をじっと見つめた。
それから再びテレビのほうに視線を戻す。
「トライメント計画……か」
理人が体を起こし、猫背になってコントローラーを手に持つ。
「どする、次のステージやる？」
司が視線をおろして、床においたコントローラーを見つめる。
手をのばしてそれをとり、ウォーミングアップのようにボタンを叩
いた。

いた。

「……理人、ちょっと試しに対戦ゲームやってみない？」

「おっ、なに、急にどうしたの？」

司が体をほぐすように首を左右に曲げた。

「まあ、ちょっと、確かめたいことがあって」

理人が口角をあげてニヤリと笑う。

「おけ一い。僕は本気をだしていいのかな？」

司が微笑んだ。

「それで頼むよ」

・
・
・

司とミリャが連れ立って海岸沿いの堤防を歩く。

司の前を歩くミリャが堤防の上に乗る。

「ミリャ、落ちるよ」

ミリャが司を振り返る。

司にニヤリとした微笑みを向けてから、ミリャが海岸側に背を向ける。

「よっ」
かけ声をあげたミリャが、バック宙で海岸に飛び降りる。
「うそでしょ……!?」
司が堤防に駆け寄り身を乗り出す。
見下ろすと、ミリャが両手を広げて司を見上げていた。
「じゃじゃーん」
司が深いため息をつく。
「まじで心臓止まるかと思ったから、勘弁して……」
「あはは、ごめんごめん」
ミリャが笑ってから砂浜を歩きはじめる。
「体が動かせると、ついね」
「……」
しばらくその背中を見つめてから、司もミリャのあとを追って隣に並ぶ。
「ミリャ、一昨日の誘導、わざとやったでしょ」
「ん？」
「昨日、大変だったんだよ。ももちゃんに詰め寄られてさ。うまく誤魔化したけど……」
「いやあ、二人を撒くにはあれしか思いつかなくて」

へらへらと笑うミリャに、司が呆れた顔を向ける。
「しかし、俺一人だと追跡されてても全然気づけないな……」
「ずっと私と一緒にいればいいと思うよ」
司が横目でミリャの視線を見つめ返す。
「それだと、追跡の原因を余計に増やさない？」
「追跡を撒くのが楽しいんだよ〜」
司が呆れたように苦笑いを浮かべる。
「目立ったら動きづらくなるってこと、わかってる？」
「ええ〜っ」
「いっそのこと、恋仲だって思われちゃった方が動きやすいんじゃないかな？」
ミリャ、口元で人差し指を立て、
司が目を丸くしてミリャを見つめる。
ミリャが司を見上げてからクスクスと笑った。
「えっ、いいの？」
「ん？」
ミリャが顔を上げると、司がミリャを見つめていた。
司の真剣な表情を、ミリャも見つめ返した。
「いや、ミリャが俺と恋仲だと思われてもいいのかなって」
「へっ？」

ミリャが首をかしげてからハッと息を飲む。

「いやいやっ、冗談だよ!?」

頬を赤らめたミリャが手をブンブンと振る。

「そうなの？」

「そうなのって……そうだよ！」

司が前を向き小さく俯く。

「なんだ……ちょっと期待したのに」

ミリャが丸くした目をしばたたかせる。

「えっ……えっ？」

司がミリャに顔を向ける。

それから口元に人差し指を立てて微笑む。

「冗談だよ、ミリャ」

「…………」

呆然としたまま固まった表情を、ミリャが司に向ける。

無言のまま前を向き、速足になる。

「ごめん、怒った？」

ミリャが更に歩を速め、司から段々遠ざかる。

「おーい」

ミリャは立ち止まらず、スタスタと森林のほうに向かっていく。

司がその森林に目を向ける。
森林の奥に、廃墟が少し見えていた。
歩きながら、司が目を細めて、朽ちた外壁の一部を見つめる。
「おっと」
司が目の前で立ち止まったミリャに気づき、ぶつかる寸前に立ち止まる。
少し俯いたミリャの後ろ姿を、司が見つめる。
「……負けないから」
「？」
ミリャの小さな呟きに耳を近づけるように、司が首をかしげる。
ミリャが大きく振り返る。
「倍返しだから!!」
吐き捨てるように言って、再びミリャが大股で歩き始める。
「……………」
口を開けたままミリャの背中を見つめる。
司が微笑みを浮かべて、ミリャの背中を追って歩き始めた。

窓から差す陽光が部屋の塵を照らしている。

窓際におかれたモダン風のじょうろに、ミリャが視線を止める。
司がグランドピアノに歩み寄り手を触れる。
「手紙はなくなっているようだけど……」
ミリャが窓際におかれたフリ一ジアをじっと見つめる。
「……」
口元に手を当て、床の一点に視線を落とす。
司がミリャを振り返る。
「ミリャ、どう思う？」
ミリャが顔を上げて司を見る。
それから花瓶に視線を戻して口を開く。
「きっとアイは、手紙を読んではくれたんだよ。お花に水をあげてるみたいだから」
司がミリャの視線を追って、窓際の花瓶に目を向ける。
「じゃあ、どうして会ってくれないんだろう」
「……」
「フリ一ジアの花弁を見つめたまま、ミリャが目を細める。
「……。求めていた司とは違ったから……とか」
ミリャが司を振り返る。
司は黙ったまま俯いていた。

「…………」
司がゆっくり顔を上げる。
「そうだ」
ショルダーバッグからタブレットを取り出し、電源を入れる。
画面を操作している司に、ミリャが歩みより、手元のタブレットを覗き込む。
「うん、やっぱり借りられたままだ」
画面を操作する手を止めて、司がじっと画面を見つめる。
画面には『親愛なるあなたへ』『貸出中』の文字が表示されていた。
「これは？」
「……記憶の手がかり、なのかな。なんとなくだけど、この漫画に覚えがあるんだ。でも、内容が思い出せなくて、一時期これを図書館で探してた。何の変哲もない漫画だけど、だからこそ手がかりになる」
司がミリャを見下ろす。
「今日の放課後の作業はフィールドワークだ。ついでに島の本屋に寄って、この漫画を探してみようと思う」
ミリャがうなずく。
「うん、わかった。私もついていくよ」

陽の差し込んだ図書館の個室で、司がノートパソコンを操作する。
頭をかき、体を背もたれに預けながらキーボードを叩く。
「…………」
司が一人で作業を続けていると個室の扉が開く。
「やあ、新田くん」
司が顔を上げて振り返ると、流花が軽く手をあげた。
「お邪魔しても？」
「もちろん」
流花が司の前の席に座る。
「昨日はうちのももがすまなかったね」
「ああ、気にしてないよ。むしろ、優秀な彼女の初心な姿が見られて楽しかったよ」
流花が目を丸くする。
「結構余裕なんだな」
「ん？　余裕？」
「ああ、いや。いつもの君なら、ああいう場面で慌てふためくんじゃないかと思ったからさ」
「ゝゝ」

「ああ」
司がノートパソコンのディスプレイに目を落とす。
「それもそうかもね」
そうつぶやいてから、司は口に手を当てて何度か、ゆっくりまばたきをする。
流花が鞄を開きノートや本を机に並べていく。
六法全書をタブレットの隣においた流花が顔をあげる。
「？」
司がじっと流花を見つめる。
流花が首をかしげた。
「なんだ？」
「あー、いや」
首に手をあてて目を逸らしてから、司が再び流花に顔を向ける。
「もしよかったら、アドバイスを貰えないかなーと……。ね」
司が気まずそうな苦笑いを浮かべる。
「ほう。新田くんに頼れるというのは、悪い気がしないね」
流花が腕を組む。
「まあ、あたしにわかることならなんでも」
流花の言葉を聞いてから、司がノートパソコンのディスプレイを流花のほうにまわす。

「これ、プレゼンテーションのまとめ方についてなんだけど」
「どれ」
流花が立ち上がり、テーブルを回り込んで司の隣に座る。
司はノートパソコンを自分のほうに向け直す。
流花が身を乗り出して画面を覗き込む。
「悪いね……勉強の邪魔して」
流花が司に視線を向けて微笑む。
「人に教えるのも勉強だ」
そう言った流花が体を引いて腕を組む。
「どの辺で悩んでるの？」
「実は根本的な所でつまづいてて……。今回、自由学習の発表に、ゲーム制作を選んだんだけど。俺はゲーム制作は全くの未経験で、理人からは初心者の視点から、開発の過程で感じたことをまとめて発表してほしいって言われてるんだ。それで、これまで学んだことや気づいたことをアウトプットして、一つの内容にまとめようとしてたはずなんだけど……」
司がキーボードに手を伸ばす。
「いつの間にか、ゲームの説明や、開発したシステムの説明になっちゃってて。そういうのは、理人やももちゃんの専門分野だし、俺に

求められているものは違うものだろうなと。だからといって、初心者の視点で感じたこととなると、すごかった、驚いた、みたいな感想しか浮かばなくてさ」

「ふむ」

流花がうなずきながら、画面を見つめる。

順番に、司のスライドを切り替えて内容を読んでいく。

「新田くんの中では、この発表で伝えたいメッセージは決まってる？」

顔を少しあげて、視線を司に投げる。

「例えば、そもそも自由学習を選んだ理由とか、その中でゲーム制作を始めようと思った理由、とかさ」

「あー……」

司が苦笑いを浮かべながら頬をかく。

「実は、理人に誘われて始めたことだったから、自分で明確な目的を持って始めたわけではなくて……」

言いよどみながら、司が流花を横目で見やる。

流花が口に手を当てて、視線をあげる。

「ふむ」

しばらくそうしてから、流花が司に視線を戻す。

「新田くんてさ、将来の夢とかあるの？」

新田くん、将来の夢とかはあるの？」
「ん――……」
口を閉じたまま、司が息をゆっくり吸い込む。
「耳が痛いね」
流花が再び両腕を組んだ。
「なるほどね」
うなずきながら、流花が目を伏せる。
「新田くん、今の生活は楽しいかい」
「えっ？」
司が目を丸くして、流花に顔を向ける。
流花は目を閉じたまま、口を開く。
「将来の夢なんてわからないからと、夢なんてばかばかしいと向き合うこともせずに、今が良ければすべて良いとした人々が――」
流花がゆっくり目を開く。
「結局自分はなにをしてきたのかと、後悔する様をよく見る」
「……」
「先に進んでしまってから、ゴールが反対側にあったのだと知ることも珍しくない。気づくのが遅ければ、夢をあきらめざるをえない未来もあり得る」
「……好きなこととか、趣味を見つけたほうがいいのかな」

流花が司を見る。
「本来、仕事は誰かのためにするもので、自己満足のためにするものじゃない。ゲームが好きだからではなく、ゲームを作ることで誰かに喜んでもらうのが好きという感覚じゃないと、仕事としては続かないこともあるかもな」
司が流花を見つめる。
「自分が〝それ〟を好きでいることと、なにかの為に〝それ〟をするのとでは、意味合いが全く異なる」
流花がノートパソコンの画面に視線を戻す。
「プレゼンのまとめ方についてはよくできてる。このプレゼンに足りないのは、大げさに言えば、君の熱い思いだな。伝えたい思いを見つけるためには、プレゼンを聞いた人たちにどうしてほしいのか、目的を持つことが重要だ」
「……」
顔を伏せた司が口元に手をあてる。
流花がそれを眺めて苦笑いを浮かべる。
「新田くんは真剣に聞くんだな」
司が顔をあげる。
「どういうこと？」
流花が本を閉じて両手を軽くあげる。

流花が体を起こし両手を軽くあげる

「あたしは相談されてもこういうことしか言えないから、よく姉に説教臭いって嫌がられてね」

　流花が自嘲する。

「最近じゃももももか」

「……………」

「まあ、あれだ。仕事なんてしたこともなく、学生生活を送ってきただけで、やりたいことを見つけろってほうが無理な話さ。森に入る前から、食べるキノコを選べと言われてるようなものだからね」

「……なるほどね」

　司がノートパソコンに視線を落とす。

「……………。知らないものを知って、経験を積んでたくさんのことを試してみたい……か」

「ほう？」

「ああ、そんなことを言っていた人がいたなと思ってね」

「いいんじゃないかね、そういうのも。一通り試してみるってことだろ？」

「そうだね」

　うなずいてから、司が画面に視線を戻す。

　その画面越しに、流花の私物と六法全書が司の視界に入った。

「…………。そうだ、大舘さん」

「ん？」

「大舘さんって法学部だったんだよね」

「ああ、そうだけど」

「どうして、法学部を選択したの？」

「ん――」

流花が腕を組み、天井を見つめながらうなる。

「まあ、人を守る力が欲しかったからかな」

「……。大舘さんって、かっこいいよね」

流花が司に顔を向けて吹き出す。

「なんだそれ」

それから、困ったような苦笑いを浮かべた。

「良き法律家は悪しき隣人というがね」

司が首をかしげる。

「……どういう意味？」

流花がくすりと笑う。

「調べてみるといいよ」

司がキョトンと目を丸くしてから、穏やかに微笑む。

「そうするよ」

ノートパソコンを脇に抱えている理人の隣に、ももが立っている。
二人に向かい合うようにしている司とミリャが携帯端末を持っている。

「それじゃ、よろしく頼むよ」

そう言った理人が手をあげる。

「いいですか！　フィールドワークですからね！　島の調査、しっかりお願いしますよ！」

両手を腰に当てて前屈みになったももが大きな声をあげた。

司が苦笑いしながら、歩き出す。

指定通り、校門の前で司とミリャが携帯端末の電源を入れた。

「すごい、もう普通にゲームになってる……」

画面を操作しながら司がつぶやいた。

「ほんと、すごいよねー。私も二人に混ざって色々教わりたかったなー」

司が顔をあげる。

「そういえば、ミリャは普段なにをしているの？」

「んーと、言ってしまえば、二上さんがやったことの再現をね」

画面を操作しながらミリャが言った。
「えっ、そんなことできるの？」
「できないんだよね、これが」
ミリャが携帯端末構えて、背面のカメラを周辺に向ける。
「おおーすごい、ちゃんと映ってる」
司がミリャの様子を眺めてから、自分の携帯端末を寮側に向ける。
「うーん、これ、初期クエストが学園か寮にしか設定されてないから、外側にも初期クエストをおきたいね。街を散策したい人もいるだろうし」
「なるほど、確かにそうだね」
「とりあえず、本屋に着くまで、よさそうな場所を見ながらいこうか」
ヤシの木の並ぶ大通りを、司とミリャが北に向かって歩く。
「そうだ司くん。今週末の深夜、時間空けられないかな」
「なんで深夜？」
「お互い、ルームメイトに見つからない時間、特に暗い時間に行きた

いところがあるんだ」
　司が前を向き、顎に手を添える。
「うーん、理人に見つからないように抜け出すのか……」
「難しい？」
「いや、最近はゲームしないで早く寝る日も増えてきたから、それを祈るしかないな」
　司が再びミリャに視線を向ける。
「とりあえず、わかった。それで行き先は？」
　ミリャが立ち止まり、山のほうを指さす。
「立ち入り禁止地区」
　司も歩を止めて、その指先をじっと見つめる。
　それからゆっくりミリャに視線を向ける。
「結構前に箒木さんとあっち側へ行ったことがあるんだけど、伊砂先生に注意されたよ。どうして気付かれたのか、全くわからなかった」
「え、そうなの？」
「ああ、ごめん。言ってなかったか。白髪の少女がトンネルの向こうへ入っていくのを見た気がしてさ。あとを追いかけたことがあったんだ。島のレポート課題をやってるときで、同行してた箒木さんも心配してついてきちゃったんだよね」
「……なるほど」

ミリャが司を見上げる。
「あそこは厳重に監視されているけど、私はどこを通ればいいかわかるから、それについては大丈夫。一番リスクが少なく、彼女たちに意思表示ができる手段かな一と。あとは純粋、第二地区の状況調査もできるしね」
司がうなずく。
「わかった。今週末はそのつもりで動くよ」

書店に入った司とミリャが店内を見渡す。
横に広い空間には本棚がずらりと並べられていた。
司が漫画と書かれたラベルのほうに歩いていく。
ミリャがそのあとに続き、二人が別々の本棚をそれぞれ見上げる。
「親愛なるあなたへ、だよね」
司が本棚に並べられた背表紙を目で追っていく。
「そうだね、作者は早乙女はづき。5巻まで出てるから、最新のものだけでも見つかるといいんだけど……」
目を細めて一段ずつ探していると、ふいに司の裾が引っ張られる。
振り向くと、ミリャが[illegible]をつかんでいた。

振り向くと、ミリャが袖をつかんでいた。
「あったよ」
「えっ」
ミリャの指さす本棚に目を向けると、『親愛なるあなたへ』と書かれた漫画が一巻から五巻まで並んでいた。
「本当に……ある」
司が手を伸ばし、ビニールで包装された一巻を手にとる。
「まさか、こんなにあっさり見つかるなんて」
「普通に流通してる漫画だったみたいだね」
本棚から五巻まで抜き出した司がミリャを振り返る。
「これ買ってくるよ」
ミリャが司を見上げてうなずく。
「ん、わかった」
背の高い本棚を見上げながら、ミリャがゆっくり店内を歩く。
ほどなくして、司が戻ってきた。
「ミリャ、買ってきたよ」
ミリャが振り返ると、司がビニール袋を持って歩いてきていた。
その袋を見つめてから、ミリャがうなずきを返す。
「じゃあ、いこっか」
「司くん、司くん」

ミリャが司の背中に声をかけた。
足を止めた司が振り返る。
「どうした？」
ミリャが奥のほうを指さす。
「あそこ、入ってみたい」
司がその先に視線を向けると、狭いスペースに黒いのれんがかかっているのが見えた。
司がゆっくり、顔をミリャに向ける。
「……だめでしょ」
「ええー、なんでー」
「なんでって……。むしろ、なんで入りたいのさ」
「気になるじゃん」
「……」
呆然とミリャを見下ろしてから、司が再びのれんに目を向ける。
ミリャが司の手をとって歩きだした。
「ちょ、ちょっと！」
手を引っぱり、はためくのれんにずいずい向かって行く。
「ちょっとだけだからっ」
「いやいや！」

「さきっちょたけたから！」
「いやいやいや！」
かぶりを振る司が、ずるずるとミリャに引っ張られていった。
彩度の高い色使いの表紙がずらりと並ぶ本棚を、ミリャがじっくり物色する。
そのうしろに、きょろきょろと周りを気にする司が続いた。
ミリャが振り返り、司を眺めてニヤニヤと不敵な笑みを浮かべる。
「……ミリャ、もういいんじゃない？」
司の言葉にミリャが眉をあげて、視線を本棚に戻す。
手をのばして一冊手に取る。
「これは？」
司が呆然と、ミリャの手元の本を見つめる。
「なにが」
「司くんの気になる本はどれかな一って」
「俺、外出てていい？」
ミリャが司の手を引いて、横に移動する。
「だめ一もうちょっと待って」

「……」
ミリャが本棚を上下に眺めていく。
その背中を、司は一歩引いて眺めていた。
「そうだよね、本当ならミリャもこういうのが気になるお年頃だもんね」
ミリャが振り返る。
「……。その手には乗らないよ」
前を向いたミリャが、悩ましげなタイトルを順番に確認していく。
「今朝は不意をうたれちゃったからねー」
「……だめか」
ミリャが振り返り、ふふんと得意げな表情を浮かべた。
「まあでも、ミリャだって本当はみんなと一緒にゲームを作ったり、やりたいこととか気になっていること、いっぱいあるでしょ」
ミリャがピタリと静止する。
「……」
目の前の雑誌を手に取り、肌色が多いイラストをぼんやり眺めた。
「それを言うなら、司くんの反応のほうが意外だったかな。もっとショックを受けたり、動揺するんじゃないかと思ってたから」
ミリャがページをめくる。
「[illegible]

「君こそ、やりたいことや、今の日常を大事にしたいと一番考えている人だと思ってたよ」
「……。やっぱり、今の俺は、今までの俺とはなにかが違っているんだろうね」
　司がミリャの隣に並び、本棚から一冊、漫画を手にとる。
　ミリャが横目で司の手元を盗み見た。
「…………」
　雑誌を閉じて本棚に戻す。
「日向子に買っていくとしたら、どれがいいかな」
「ん？」
　手を後ろに組んだミリャが本棚を見上げる。
　司が目を丸くしてミリャを見下ろす。
「え、買っていくの？」
　ミリャがうなずく。
「お土産」
　司が頭を抱える。
「えっと……、なんで？」
「サプライズ。日向子の驚く顔が見てみたいなーって」
「これ以上ないサプライズではあると思うけどさ」
　ミリャの目が一冊の本に止まる。

「お、これなんかいいかも」
ミリャがその本に手を伸ばす。
表紙には、スーツを着崩し、悩ましげな表情で教壇に座っているメガネの女性が描かれていた。
「…………」
「これにしよう」
ミリャがニヤニヤしながら司を見上げる。
「司くんは買わないの？」
司が大きなため息をつく。
「買わないよ……」

・　・　・

寮の部屋で、理人がテレビの電源をつける。
ゲーム機を床に広げて、コントローラーをつなげる。
「司、今日はやらない？」
机に座ってノートをとっていた司が手を止めて振り返る。

「ああ、今日はちょっと読みたい漫画があって」

「漫画？　珍しいね。図書館で借りてきたの？」

「いや、ミリャ……ちゃんに借りたんだ」

「これまた意外な。君ら本当に仲いいね」

「……まあね」

理人がゲーム機の起動ボタンを押して、画面の前に座りなおす。

「僕にはよくわからないけど、ミリャちゃん、最近反応がよくなってきた気がするよ」

「ん？」

「彼女、外の刺激を受けて病状が快復していくんでしょ？　確かに、最初と比べるとかなり意思疎通できるようになってきた気がする」

「……………」

「司の頑張りもあるんじゃない？　このままよくなっていくといいね」

「そう、だね」

部屋の扉を開けて玄関に入ってきた日向子が靴を脱ぐ。

「ただいまー」

廊下を進み、寝室に入る。

「まだ、帰ってないか」

机の近くに鞄を降ろしてから椅子に座り、机に置かれたノートに手を伸ばす。

「あれ？」

日向子の視線がノートの隣の黒いビニール袋の上に止まる。

「んん」

袋を手に取り、中から本を取り出す。

日向子の目が、表紙に釘付けになる。

「…………」

しばらく表紙を見つめてから日向子が目を丸くする。

勢いよく立ち上がり、椅子が後方に倒れた。

「な、な、なななななななな」

頬を赤らめた日向子の口がわなわなと震える。

周囲を見渡し、本をビニールに戻す。

「…………」

大きく深呼吸をしてから、机の下やベッドの下を覗き込む。

立ち上がって、口元に手を当てる。

それから玄関に行き、扉を開けた。

扉から顔を出した日向子が、周囲をキョロキョロと見回す。
それから音もなく顔を引っ込めて扉を閉めた。
日向子が玄関からどたどたどたと寝室に向かう。
机の上の黒いビニールを凝視し、もう一度中から本を取り出す。
目を細めて恐る恐る、ページをめくる。
「ほわーーーーーーーー」
本をバンッと両手で閉じ、またゆっくり手をのばして、もう一度開く。
「ぴゃーーーーーーーーー」
バンッと閉じる、再び開く。
それを何度か繰り返して、日向子はその本を手に取った。
立ったまま、食い入るように眺める。
「しゅ、しゅごい……」
日向子の服がくいくいと、後ろから引っ張られる。
「へ？」
日向子が振り返ると、ミリャが日向子を見上げていた。
日向子の手から本が落ちる。
時計の針の無機質な音が部屋に響く。
日向子が真顔のまま、足元に落ちた本を蹴り飛ばし、机の下に本が滑り入る。

沁し込む
　ミリャの両肩を掴んで、その目をまっすぐ見つめる。
「えへへぇ、おかぇりぃ、ミリャちゃん」
「……（こく）」
「い、今、ご飯つくるからねえ」
　日向子がそそくさとキッチンに向かう。
　ミリャがその後ろ姿を見つめ、日向子が見えなくなると、その場にしゃがんで机の下へと手を伸ばした。
　ミリャの手が本を掴み、立ち上がる。
「あ、ミリャちゃん、今日のご飯なにがあぁあああああああああああああああ！！！」
　寝室の入り口にひょこっと顔を出した日向子が、ミリャの手元の本をみて大声を上げた。
「あああああああああああっ」
　ミリャに駆け寄り、本を奪いとって後ろに隠す。
「こ、これは違うの。な、何故かここにおいてあったんだけど、危ないから私が捨てておくね!!」
　日向子がぎこちない笑顔を浮かべながら後ずさりしていき、そのまま寝室から出ていく。
　ミリャはそれを見送ってから椅子を引いて座り、両肘を机に立てて

頬杖をつく。
「……満足」
　ももがキーボードを叩く音が部屋に響く。
　エンターキーを叩き、体を引いて画面を見つめる。
　しばらくそうしてから、再びキーボードを叩き始める。
　隣の机でノートにペンを走らせていた流花が、ノートを閉じる。
「あたし、そろそろ寝るけど」
　もものほうに顔を向けて流花が言った。
「あ、すみません。もう少しで終わるので」
　画面から目を離さずももがこたえ、手元のタブレットとPC画面を見比べる。
　流花がももをしばらく眺めてから立ち上がり、もものうしろに立った。
　前屈みになって、ノートパソコンの画面を覗き込む。
「……なにをまとめてるんだ？」
「んーーー」
　ももが手を上めずこ考える。

「ここ最近疑問に思ったことの……関連性をまとめているといいますか……」
中指でエンターキーをトントンと、二回軽く叩く。
「ん――――」
「あー、邪魔して悪い。気にしないでくれ」
「んー」
流花がタブレットを見下ろすと、トトが嬉しそうにウィンドウを操作していた。
流花が苦笑いを浮かべる。
「……なんか、見たことあるんですよねぇ……」
ももが目を細める。
流花の視線が、タブレットからももに移る。
「……夢を見る……人工知能」
流花が首をかしげる。
「ミリャさんの調べていた研究や論文が気になっているんですって」
流花がタブレットの中のトトに目を向ける。
「ミリャが？」
「はい。最近のももはミリャさんにご執心ですね」
「ふむ……」

ももがパタリとノートパソコンを閉じる。
「終わりにしますか？」
「……………」
ぼんやりした視線のまま、ももは黙っていた。
流花がももの背中をつつく。
「もも、寝るのか？」
「ん――」
「こりゃだめだな」
「久しぶりにこんなももを見ました」
トトが満足気に微笑みながら言った。
「嬉しそうだな」
「えっ？」
トトが流花を見上げる。
「それはもう！　なにかを探求するももの姿には惚れ惚れしちゃいますっ」
自分の両頬をむにむにしながらはにかむトトを見下ろして、流花が苦笑いを浮かべる。
「まあ、わからんでもないが」
そうつぶやいてから、もう一度ももに顔を向けた。
「ん―――

ん―――」

・・・

休み時間の雑然とした教室でミリャが席を立ち、理人の席に駆け寄る。
理人は机に開いたノートをぼんやり見下ろしていた。
その肩をミリャが叩く。
「……ん?」
理人が振り返って、ミリャを見上げる。
「おお、どうしたの、ミリャちゃん」
ミリャがうなずいて、窓際の席を指さす。
理人がその方向に顔を向ける。
「……ああ、司ね。今日、調子悪いみたいで休んでるんだよ」
理人がミリャを見上げる。
「人に移るような病状ではなさそうだけど、今日はとりあえず安静にしてるって」
「………」

ミリャがぺこりとお辞儀して、自分の席に戻っていった。

ミリャの席を囲んで、理人とももが立っている。

「ええ一。いいじゃないですか！　ちょっとだけ、ちょっとだけですってば！」

ミリャが机の上のタブレットを両手で覆い隠している。

ももがそのタブレットを引き抜こうと手をのばす。

「もう！　それならば！」

ミリャの背後に回り込む。

「おらら一っ！」

ももがミリャの脇をくすぐる。

ミリャは平然としたまま両腕を後ろに回し、ももの脇をくすぐり返す。

「ふぇ!?　うひゃあああ!!　だめ、だめですっ、やめっ。あひゃひゃひゃひゃひゃ」

ももが後ろに飛び退いた。

前屈みになって荒い息を吐きながら、片手に持ったタブレットを掲げる。

けそ。
「フフ、フフフフフ。甘いですね、ミリャ。これぞ研究者の戦い……技術は仲良くしぇあ!!」
大きく腕をあげて、ももがおおげさなポーズを決める。
ミリャが口を開けて呆然とももを見上げてから、自分の机を確認する。
「！」
タブレットがないことに気付いたミリャが目を見開く。
理人が肩をすくめてため息をつく。
「元気だねぇ」
「あ──!? ロック掛かってる!! 生意気ですよミリャ！」
タブレットから顔をあげて、ももがミリャをにらんだ。
ミリャが立ち上がり、ももの頭を撫でる。
「情けはいりませんよ、ミリャ」
鞄から野菜チップスをとりだし、ももに差し出す。
「野菜もいりませんよ、ミリャ」
ミリャはしばらく野菜チップス眺めてから、自分の口に放った。
「じゃ、3人でご飯に行きますか」
ももが理人を見上げてから、人気のなくなった教室を見回す。
「あれ……司は？」

「ああ。司は今日、休みだよ」
「休み？」
理人がうなずく。
「なんと……どうしたんでしょう……」
ももが口元に手をあてて考える。
「あれで、司はもともと病弱なところあるからねぇ……」
「………」
四人掛けのテーブルを、ももとミリャ、理人が囲む。
ミリャが野菜スティックをポリポリとかじっていた。
「あ！！！！」
タブレットを操作していたももが突然大声をあげる。
ミリャと理人がももに視線を向ける。
「うわっ！！！　急にどうしたんですか？　もも」
タブレットの中ではトトが腰を抜かしたようにペタリと座り込んでいた。
「あ、スミマセン。いや、ももちゃん、思い出しました!!」
[illegible]

理人がパックのストローを吸って一口飲み込む。
「思い出した？」
ももが腕を組む。
「はい、ミリャの研究していた内容、ずっとなんだか引っかかっていたんですよ」
「ほう？」
野菜スティックを食べていたミリャの動きが止まる。
それから、口に入った生の人参をゆっくり咀嚼した。
「神経内科学研究機関エミスですよ」
再び、ミリャの動きが止まる。
「しんけい……けんきゅうきかん……なんだって？」
「むむ？」
トトがタブレット内でぴょこんと立ち上がり、色々なウインドウを呼び出す。
「……ふむふむ、フランスの民間研究機関ですね。もも、これがどうかしたんですか？」
ももが腕を組んだまま人差し指を立てる。
「レイ・ブラン・ホラトレイスです。彼の論文を思い出しました」
ミリャの視線だけがももに向けられる。
「それが、ミリャちゃんの研究しているものと近いってこと？」

「近いというより……。むしろそのものです」
「……よくわからないけど、すごいということは分かる」
「はい、すごいんですよ、ミリャは！」
ももがテーブルに乗り出してミリャを見つめる。
ミリャはももの視線から逃げるように目を逸らした。
「いやースッキリしました。もう気になって気になって仕方がなくて」
テーブルから手を離したももが、再び腕を組む。
「しかし、そうですか。確かに、彼は6年前に亡くなったばかりで、研究内容も完全にストップしてしまったみたいですからね。その内容に興味を抱くのはわからなくもないです。ウーン。これは本格的にミリャと手を組むべきですかね」
片手を口にあてながら、ももがニヤニヤと笑う。
「ミリャさんなら、確かにももの相方にぴったりですね！夢が膨らみます！」
「………………」
ミリャが俯いた。

授業が終わった教室で、生徒達が帰り支度をしている。
ももと理人が、またミリャの机に集っていた。
ミリャが立ち上がりリュックを背負う。
「僕はいつも通り、パソコン教室に向かうけど、ミリャちゃん今日はどうする？」
ミリャが理人を見上げて、窓の外の学園寮を指さす。
「だろうと思った。僕の友人をよろしく頼むよ」
ミリャが黙ったままうなずく。
ペコリとお辞儀をして手を振り、そのまま出口に向かっていった。
その背中を、ももと理人が見送る。
ミリャが見えなくなってから、理人が隣のももを見下ろす。
「ももちゃんは、二人を追うのかな？」
「えっ？」
ももが理人を見上げて目を丸くする。
「ああ、いえ。ももちゃん、ちょっと調べたいことがありまして」
「あら、そうなの？」
「はい。なので今日は図書館に行ってきますね」
そう言って、ももが両手でリュックの紐を掴む。
「ん、了解。それじゃ、ももちゃんもまたね」

「はい、また明日です！」

・・・

――誰もいないロビーを横切ったミリャが端末の前で立ち止まる。
番号を押し、呼び出しボタンを押す。
何度かコール音が続いたが、やがて鳴り止み、再び静寂が訪れる。
しばらく端末をじっと見つめてから、ミリャは踵を返した。
――ミリャが扉をノックする。
反応はなく、取っ手を掴んだミリャがガチャガチャと扉を揺らす。
手を離し、しばらくドアを見つめてから、ミリャはまた踵を返した。

閉じたカーテンのわずかな隙間から光が漏れる。
その光が、ベッドに寝そべった司を照らす。
まぶしさに表情を[illegible]

呆然とした表情で目をうっすらとあけている。
部屋の窓がガタガタと音を立て、司が身を起こす。
「……？」
立ち上がった司が窓に歩み寄り、カーテンを開く。
「…………」
窓にへばりついたミリャと司の目が合う。
口を開けたまま司が固まる。
しばらくそうしてから、急いで窓の鍵を開けた。
窓が開くと、ミリャが司の脇を通って部屋に降り立つ。
「ちょ、なに、どうしたの⁉」
ミリャが窓に背を向けたまま、視線だけ司に向ける。
「それは、こっちの台詞だよ」
ミリャが司を振り返る。
「心配した」
司が目を丸くした。
「ああ、さっきのチャイム、ミリャだったんだ」
ミリャが首をかしげる。
「誰だと思ったの？」
「ん……ちょっとぼーっとしててね。心配かけてごめん」
ミリャが司の顔をのぞき込む。

「……無理してない？」
「ぜんぜん」
「そっか」
司から視線を逸らし、ミリャが台所に目を向ける。
「台所、借りるね」
「ん、うん」
「病人は、ベッドにでも座っててください」
ミリャが台所の方に歩いていく。
その背中を司が見送った。

ベッドに腰かけた司が、お盆を持って部屋に入ってきたミリャに顔を向ける。
ミリャはテーブルにお盆をおき、お茶を司に差し出した。
「熱いよ」
司が湯飲みの側面と底に手を添えて受け取る。
「ありがとう」
ミリャが司の隣に座る。

「体調は大丈夫なの？」
司がお茶をゆっくりとすすって、口を離す。
「ああ、体調には特に変化はないよ。少し考えを整理したかったんだ」
「そっか」
司がもう一口お茶を飲んだ。
「美味しいな……こんな茶葉うちにあったっけ」
ミリャがＶサインをつくる。
「おうちから持ってきました」
「……わざわざ悪いね」
ミリャがゆっくり首を振る。
「まあ、相変わらずで少し安心した」
「…………」
ミリャが司の横顔を見つめる。
「なにか、わかったの？」
司がぼんやりと、机の上に積まれた漫画を眺める。
「漫画は五巻まで読んだよ。基本的にはなんでもない普通の漫画だった。それに、まだ未完の状態みたいなんだ」
「じゃあ……、記憶を思い出した、とか？」
司が漫画を見つめたまま目を細める。

「……いや。むしろ、記憶がないという現状を、やっと理解できたよ」

司が手元のお茶を見下ろし、両手で湯飲みを包む。

「今までは、曖昧ながらも記憶はあったんだ。でも、それがどうにも違和感でしかなかった。適性検査を受けたとき、その矛盾を特に感じた。機械にも、自分の違和感を見透かされたみたいに、色んな角度から矛盾を埋めるような質問を繰り返されたよ。その、違和感がようやくわかったんだ」

司が顔を上げ、もう一度、机の漫画に目を向ける。

「あの漫画の内容は――」

窓から入り込んだ風がカーテンをなびかせ、漫画のページがめくれる。

「――俺の記憶、そのものだったよ」

・・・

夜、リュックを背負った司とミリャが振り返り、寮を見上げる。

司がミリャに顔を向けると、ミリャも司を見上げて、うなずいた。
二人は道を逸れて、草の中を歩いていく。

暗闇の中、ミリャが先を歩き、そのあとに司がついていく。
夜を飾る虫の鳴き声に、波が岩を叩く音が混ざっていた。
二人は山のほうに向かって海辺を歩いていく。
「なんだか、夜の散歩ってワクワクしない？」
そう言ってミリャが司を見上げた。
司がミリャに顔を向けてから、ゆっくり周囲を見渡す。
「わかるよ。夜の外は、まるで別世界だ」
夜空を見上げた司の瞳に、満月が映り込む。
「この間の日向子が参加してた島のナイトツアー、覚えてる？」
「ん、覚えてるよ」
「最近になって思い出したんだけど、あれ、私参加したことあるんだ」
「えっ、そうなの？」
司が目を丸くしてミリャを見下ろす。
「うん。そもそも、私が歩き回った記憶が、この島で最後なんだよ」
司は黙ったまま、先を歩くミリャの背中を見つめた。

「この島にお父さんと来たとき、ナイトツアーを運営する知り合いに預けられたんだ。お父さん、外せない仕事があったから。面白かったよ。いろいろな植物が生えてて、昼間とは違う姿を見せるの。光るキノコとかあってね。すっごく美味しそうだったんだけどガイドさんに止められて、悲しかったのを覚えてる」
司が微笑む。
「ミリャらしいね」
「今日は森を通っていくから、もしかしたら見られるかもしれないね」
司が遠くの山を見上げる。
「それは、楽しみだな」
立ち止まった司とミリャが大きなトンネルを見上げる。
『工事中　立ち入り禁止』と書かれた看板が立てられていた。
司が横を振り返り、街の景色を見下ろす。
「深夜に見るここの景色も綺麗だね」
ミリャも同じように街の光を見下ろしてうなずく。

　司が振り返り、トンネルから続く山の道を見上げる。
「さて」
　ミリャが司を振り返り、一歩踏み出した。
「行こうか、司くん」

　司とミリャが暗い山の中を歩いていく。
　草木が生い茂る獣道を、月明りだけを頼に進んでいく。
　枝分かれした道で司が立ち止まる。
　それから、片方の道をじっと見上げる。
「どうしたの？」
「いや……、なんでもない」
　司が歩き出す。
「今ちょうど、島の中心あたりにいるはずだから、あとはずっとくだっていくだけになると思う」
「ふぅ、やっとか」
「木で覆われて景色が見えないのがちょっと残念だね」
　ミリャの背中を追って歩いていた司が立ち止まり、もう一度分かれ道を振り返る。

道を振り返る。
それから前を向いて、また歩き始めた。

段差を飛び越えて、司とミリャが大通りに出る。
周囲を見渡した司が両手を腰にあてる。
「はぁ、これ、帰りもまた通るのか……」
「ふふ。お疲れさま」
二人がリュックからペットボトルを取り出し、水を飲む。
「はあ、だいぶ汗かいちゃったね」
「かなり余裕そうに見えるけど」
「んふふ、このくらいはへっちゃらです」
司が肩をすくめる。
それから周囲を眺めて、水をもう一口飲んだ。
「前、昼間にきたときは異様な光景に思えたけど、深夜だと普通の街だね」
「まあ、ライフラインは機能してるはずだしね」
ミリャが道路に沿って歩きはじめる。
司もそのあとを歩き始める。

「このあとはどこに向かうの？」

「うーん、今日はとりあえず島の末端まで歩いていって、お昼前には戻りたいね」

「……休憩とか、あるのかな」

「あはは、大丈夫だよ。もう少し歩いたら休憩できる場所があるから、あともうひと踏ん張りだー」

そう言ってミリャが拳を振り上げる。

司もそれに合わせて、軽く拳を上げた。

階段の下から水音が届き、辺りには湯気が広がっている。

仕切りの柵の向こうで、桜や木々が崖の下まで彩っていた。

司とミリャが、その景色を見下ろす。

「確かに休憩にはもってこいかもしれないけど……」

「でしょー。景色がまた綺麗だよね」

そう言ってミリャが靴と靴下を脱ぎ、下駄箱に放り込む。

司に背を向けたまま、上着を脱ぎ始める。

「ちょっ、ミリャ、ここで脱がないでよっ」

司がミリャに背中を向ける。

司がミリャに背中を向ける。
「ん、足湯だけだよ。上着はちょっと暑いから脱いだだけ」
司がチラリとミリャに視線を投げると、長袖のカットソーを着たミリャの姿が見えた。
「それとも、一緒に温泉入る？　司くん」
ミリャがイタズラっぽい笑みを浮かべる。
司がゆっくり振り返り、ミリャを対面する。
「知ってる？　ここって混浴できる温泉なんだよ」
司がじっとミリャを見つめた。
「ミリャ、前に騙したこと、まだ根に持ってるの？」
「どうでしょう」
「はぁ」
ため息をついた司が靴と靴下を脱いで下駄箱に入れる。
振り返ると、ミリャがペタペタと温泉に向かっていた。
ミリャが楽しげに、岩でできた湯船のそばにおいてある長椅子に駆けていく。
そこに座り、お湯につけた足を交互に動かす。
前屈みになったミリャの服が引き上げられ、尾てい骨辺りに描かれた両翼の模様が隙間から見えた。
「…………」

司がじっとミリャの背中を見つめてから、湯船のほうに歩いていった。

司とミリャが、虫の鳴き声が響き渡る道を歩く。
周囲には人の姿も車の音もない。
夜空を見上げた司の視線の先で、満月が暗い夜を照らしていた。
……明らんできた水平線を、司とミリャが柵の上から眺める。
二人の眼前に、波穏やかな泊海岸が広がる。
遠浅の湾内の水面に、満月が映し出されている。
「すごく、綺麗だね……」
ミリャがうなずく。
「なんか、普通に楽しんじゃってるなあ」
ミリャが柵にかけた両肘に頭をのせる。
遠くの海をじっと眺めるミリャに、司が一歩近づく。
「ミリャ、一つ聞いていいかな」
「ん？」
司がミリャの背中を見つめる。
「ミリャ、君は、新田金次、俺の父さんを覚えているかな

「ミリャ、君は……新田金秋、俺の父さんを覚えているかな」

司が顔を伏せた。

「……どんな人だったか……とか」

ミリャが司を振り返る。

俯いた司をしばらく見つめてから、また海のほうを向く。

「私も会ったのは一度だけで、ほとんど会話は交わしてないんだ。ただ、前も話したように、君のお父さんと私のお母さんはオーストラリアの大学で知り合って仲が良かった」

司がミリャの隣に並ぶ。

「新田金秋さんは社会学専攻で……あ、そうだ」

ミリャが司を見上げる。

「お父さんが、伊砂みたいな人だったって」

「伊砂先生？」

ミリャがうなずく。

「そもそも、お父さんの作ったシステムは伊砂さんの影響を強く受けているみたいだったから。それが巡り巡って、新田金秋さんとの関係を繋げたんだから、社会は面白いよね」

ミリャが微笑みを浮かべる。

「……そうか」

司が水平線を見つめながら目を細める。

「自分の両親のことですら、赤の他人のように聞こえるなんてね」
「人々が皆、他人同士である事は確かだよ。ただそこに、見えない繋がりを想う気持ちがあるかどうかで、私たちは関係しあっているんだと思う」
「……でもそれ、相手からの一方的な片思いってことにならない？俺が、なにも覚えてないんだからさ」
「そうだね」
ミリャが柵を掴み、体を後ろに倒す。
「でも私と司くんは、同じ目的を共にする、両想いだよ」
そう言ってミリャが微笑みかける。
「…………」
司が大きなため息をつく。
それからミリャに顔を向けて、苦笑を浮かべる。
「……。俺たちの両親の関係性といい、計画の関係者であることや、病気のこと……なにもかも、偶然とは思えない。どこかに必ず、関連性はあるはずだ」
ミリャがゆっくりうなずく。
二人は口を閉じて、水面を見つめた。
静寂に波の音が際立つ。
[illegible]

水平線に太陽がわずかに現れ、空をしんわりと照らし始める。
ミリャが司に顔を向け、裾をひっぱる。
「ちょうど朝日が昇るころだし、間近で見ていこうよ。きっと、すごく綺麗だよ」
「ん……。そうだね」
司がミリャを見下ろして微笑む。
「行こう」

白い砂浜が、水平線から昇る朝日に照らされて輝く。
陽の光が司とミリャの影をうっすらと作る。
海面に光の橋が架かり、空が少しずつ白んでいく。
司とミリャは肩を並べて、空と海の境界線を見つめていた。
司がチラリと横に並ぶミリャを見下ろす。
「すごい……綺麗……」
ミリャの横顔を見つめて司が微笑み、前を向く。
「うん、綺麗だ。……」
司が目を見開き、胸に手を当てる。
「……。アルファ？」

司が小さくつぶやいた。
それと同時、人の気配を感じた司とミリャが、やはり同時に振り返る。
「……！」「……！」
そこには、白髪を揺らし、ポツンと佇むユウの姿があった。
司が目を見開く。
「君は……」
ゆっくりと瞬きをしたユウの視線が司に向き、焦点が合う。
「司……」
ユウがつぶやいたあと静寂が訪れ、再びユウが口を開く。
「ここは立ち入り禁止区域です。なぜ、ここにきたんですか？」
司とミリャが顔を見合わせる。
「……えっと……」
「…………」
ミリャがユウを見つめる。
「……あなたに、お会いしたいと思っていました。ここにきたのは、真実が知りたいから」
「…………」
ユウがミリャを見て、一瞬やや目を見開く。
「ミリャ、あなた　病気は

「……ミリャ。あなた……病気に……」

ユウの質問に、ミリャが目を丸くする。

「……………」

ユウが目を閉じ、しばらくしてから、ゆっくりと開く。

「……真実、とは？」

司が、不安げに二人を眺めていた。

「……私は、トライメント計画に起きた問題を解明し、解消したい。そのために、知りたいんだ」

ミリャがユウをまっすぐ見つめる。

「この世界が閉ざされた理由、トライメント計画に問題が発生した理由。それが、私の知りたい、真実」

「……………」

ユウが司に視線を向けて、またミリャに戻す。

「……そのために、司を利用したのですか？」

「……！　それは違う」

ユウが表情を変えずに続ける。

「……本当に違うといえますか？　司は自ら考え、選択し、ここへきたと？」

「…………………」

司がミリャに顔を向けると、ミリャも司を見上げていた。

それから司が俯く。
目を瞑り、深く息を吸ってから顔をあげる。
「俺は、俺自身の過去を知る人に会うために、ここにきた」
ユウが司を見つめる。
司もその視線をまっすぐ見つめ返した。
ユウが、お腹の前で組んだ手を握る。
「それを知って、どうするのですか」
「自分のすべき行動を見定めたい」
司とミリャから伸びた長い影の間に、ユウが立っている。
白い髪が潮風になびき、静かに宙を漂う。
目を細めたユウが、顔を少し下に向ける。
しばらくそうしてから顔をあげて、再び司を見つめる。
「司。少し、質問をしてもいいでしょうか？」
司がチラリとミリャを見下ろす。
ミリャが小さくうなずく。
司がユウに視線を戻して、うなずいた。
「問います。司。今の生活は、楽しいですか？」
「……………」
司は口を閉じたまま目を瞑った。

波が何度か寄せて返し、司が目をゆっくり開く。
「うん、楽しいよ。今の生活は、楽しい。それは、胸を張って言えると思う」
ユウがじっと司を見つめ、小さく微笑む。
「そうですか。それならば――」
「けれど、俺はこのままではいけないと思う」
「…………」
司がユウを見つめる。
「……今の生活は楽しい。そう思えるのはこのトライメント計画のおかげだ。そのトライメント計画に今、なにかが起きている」
ユウが、胸に当てた手をぎゅっと握る。
「あなたの言うとおりだ。俺は、自ら考え、選択し、ここにきたわけではない。ただ……」
言葉を切った司が俯く。
そして、凛とした表情をユウに向けた。
「俺はあなたの知っている司ではないかもしれないけど、俺自身が、今を変えたいと願う気持ちは本物だ」
ユウが顔を伏せる。
「…………」
胸に当てた手をゆっくりおろした。

「……そうですか」
風が吹き、司の目の前に花びらが舞う。
「あなた方は正しい」
そう言って、ユウが顔をあげる。
「それは、世界の秩序を司る法律が示しています」
「…………」
「…………」
「ですが、法は法の外を守ってはくれない」
ユウが司とミリャを交互に見つめる。
「裁決を下すことができるのは、結局、力を持つ者だけです。貴方の想いと私の想い。どちらが強いか——」
ユウが司に、静かに微笑みかける。
「証明してみせましょう」
司が両手をぎゅっと握る。
「そこまでわかっていて……どうして協力できないんだ」
「真実を知った時、貴方は必ず、自らを犠牲にする選択をするからです」
「……」
俯いたユウが目を閉じる。

「……」

顔を上げたユウが司を見つめる。

「司は記憶を失っている、そうですね」

司がごくりと喉を鳴らす。

「……　そうみたいだ」

「……」

ユウが目を伏せる。

「その記憶喪失の原因を、考えたことはありますか」

「……。自分の過去に、思い出したくない原因があると……考えている。そして、あなたはその俺の過去を知っているとも」

「……」

目を伏せたままのユウが、静かに口を開く。

「そこまで考えてなお、過去を思い出そうというのでしたら——。……いいでしょう」

ユウが顔を上げて、司の目をまっすぐ見つめる。

「……司は生まれながら、脳の病気を患っていました」

ユウの視線がミリャに移る。

「ちょうど、貴方の隣にいるミリャさんと、同じ病気だと考えられています」

「……」

……司がミリャに視線を向ける。

「ですが、貴方の状態はずっと安定していた。ある事故が起きるまでは」

「……」

司も、自分を見つめるユウの視線を見つめ返していた。

「七年前の事故を機に、抑えられていた病気が発現し、貴方は植物状態となってしまった。神経細胞の死滅に始まるその病は、放っておけばやがて死に至ってしまう」

ミリャが目を細める。

「その病を抑えるため、貴方の母親が尽力しました」

ユウが言葉を切って、顔を伏せる。

「けれど……足りなかった。病状を快復させるためには、脳が自立した機能快復を遂げるまで継続的な刺激を与えられる大規模な装置が必要だった」

「……トライメント計画」

ユウが小さくうなずく。

「はい」

「……………」

ユウが手に力を込めて、小さな拳を握る。

「すべてを揃えて、貴方は目覚めた」
ユウがゆっくり瞬きをする。
「すべての記憶を失って」
「……………」
「それもそのはずです。事故のあと、調査の果てに数々の『証拠』が見つかりました。……司はずっと危険信号を示していたんです。私たちはそれに気づくことができなかった」
「……………」
「司。貴方は、本当に『あの』醜悪な世界に戻りたいのですか？」
ずっと俯いていたユウが顔を上げる。
「……………」
司が呆然とユウを見つめる。
その横顔を、ミリャが不安げに見上げる。
ユウが目を閉じる。
「話は終わりです。どうか、お引き取りを」
「……………」
司が、脱力していた口をゆっくり閉じ、ぐっと拳を握る。
ミリャが司の手を見下ろしてから、ユウに顔を向ける。
「……わかった。今日のところは引き上げる」
司がミリャを見下ろす。

「最後に、一つだけいいかな」

「……なんでしょうか」

「……トライメント計画に起きた問題って、なんだったんだろう」

ユウが押し黙る。

「あなたの話が本当なら、わざわざ計画に問題を起こす理由がない」

「……」

ユウが俯く。

「……問題は、意図的に起こしたものではありません……」

小さく息をつく。

「そして、だからこそ……問題となってしまった」

ミリャが眉を寄せる。

「……意図的ではない？……一体、どういう……」

言葉を切ったミリャが、目を泳がせてから見開く。

「……君は、何をしたの？」

ユウが顔を上げて、ミリャを見る。

「質問は最後に一つだけだと」

ミリャが苦笑を浮かべた。

「……そうだったね。ありがとう」

ミリャが司の裾を掴んで引っ張る。

司がミリャを見おろす。
ミリャは司に向かってうなずいた。
二人はユウのほうに歩み寄っていき、すれ違いざまにユウと司が視線を交える。
そのまましばらく歩を進め、司が立ち止まる。
遅れてミリャも立ち止まり、司を見つめる。
司がユウを振り返る。
「君が真実を隠す理由はわからないけど、俺の身を案じてくれていることはわかった。ありがとう」
そう言って司はユウに背を向けて、再び歩き出す。
ミリャはユウの背中を見つめてから、司の背中を追いかけた。
「…………」
ユウは海に昇る太陽を見つめ、それからゆっくり空を仰いだ。
うっすらと残っていた満月がユウの瞳に映り込む。
「……月が、綺麗ですね」

・
・
・

…………

………

……

「4月5日午前6時6分。問題は、参加者が御雲島に到着した翌日の朝に起きた。運営上、問題が起きた時に安全確保のため行われる、強制的な対応マニュアルの一つ――。――緊急ログアウトが、トライメント計画の運営者と参加者に対して開始された。司くん、この世界は現実ではないんだ。夢という名の電脳仮想世界。ログアウトというのは、この仮想世界から現実へと戻る手段のことを指す。緊急ログアウトが行われたということは、計画になにか問題が発生したということと。それは、同時にトライメント計画の中止を意味する。けれど、私たちはまだここにいる。そう、私たちは閉じ込められてしまったんだ。この、創られた夢の楽園にね」

TrymenT
—今を変えたいと願うあなたへ—
V

2020年8月29日 発行

脚色
えある

原作
TrymenT

カバーイラスト
雫将維・クロノミツキ

本文イラスト
雫将維・クロノミツキ・mocha

カバーデザイン
shotaro ichinose

公式サイト
re-tryment.com

公式Twitter
@TrymenT_PJ

発行
TrymenT

本書の無断複製、無断転載、無断アップロードを固く禁じます。

©TrymenT AlL RightS ReserveD.

TrymenT

目次

登場人物名簿
空白の星霜
片翼の標